

縄文時代中期後葉に見られる 埋納土器の特性

小此木 良子 (121-823758-0)

放送大学大学院 文化科学研究科

人文学プログラム

研究指導責任者 五味 文彦 教授

2015年1月

目次

はじめに	1
第 1 章 埋納土器の分布と変遷	4
第 1 節 地域別事例と概要	4
第 2 節 分布と範囲	25
第 2 章 内容物と住居址	32
第 1 節 内容物の分析	32
第 2 節 住居形式と埋納土器	41
第 3 節 住居址との関連を探る	46
第 3 章 考察	57
終わりに	60
参考文献	65
付録	69

はじめに

縄文時代の遺構からは稀に、石斧や黒曜石などを入れた土器が埋められた状態で出土する。これを埋納土器と称し考察したことがある¹。その集計作業の中で、事例が縄文時代中期後葉から後期初頭に集中していることが読み取れた。

埋められた状態で出土する土器の呼び方は、埋設土器、埋置土器、埋甕など報告書によって様々だが、現在では埋甕という呼び方が一般的である。用途に関しては貯蔵・建築儀礼・信仰との関連・埋葬・胞衣容器デポなど諸説ある。埋葬棺説には、中部山岳地域の石蓋付埋甕を「幼児甕棺」と想定した桐原説²（桐原 1967）、土器内から幼児骨が検出された千葉県殿平賀遺跡例から埋甕すべてを「幼児埋葬用土器棺」とした渡辺説³（渡辺 1970）などがあり、胞衣容器説は、住居址入口に設置される埋甕事例が多いことから胎盤を戸口に埋める習俗と結びつけて⁴「胞衣（胎盤）収納容器」と唱えた木下説⁵（木下 1970・1976）などが主流となっている。

だが、時代も地域も出土状況も異なる埋設土器を、総て一つの用途、同一のケースとして扱って良いものだろうか。埋納土器を調べていく中で、「埋められた土器」＝「埋甕」＝「幼児埋葬棺」あるいは「胎盤収納容器」のように用途を固定化することに疑問を感じ、この時代に出現した埋納土器を広く調べるところとなった。

埋設土器は縄文時代の中期から弥生時代まで、場所によってはその後も検出されるなど報告例が多い。それとは異なって埋納土器は、ある時期に集中的に現れ消えてしまう。それは、気候変動による人口減少や

集落の興亡、新住居形式の出現⁶など、縄文時代の画期といわれる時期とも重なる。特殊ともいえるこの土器は、その変動期と何らかのつながりを持っている可能性がある。幸い埋納土器は事例も少なく出現時期も限られている。この土器の特徴を知ることができれば、縄文時代中期末葉の一面が見えてくると考え、研究に踏み切った。

当論考では、埋納土器事例を時間変化や住居址との関連を核に調査する。大きな動きがあったといわれる縄文時代中期後葉の様相を埋納土器の特性から探ると同時に、埋納土器は従来の埋甕とは区別すべき遺構であるか否かを考察する。

対象は副葬品としての遺物が検出された事例以外の、物を入れ埋めた土器とする。物とは自然物も含み、加工されていない小石など自然石も同様に取り扱う。報告者が人為的納入とみなしていれば、内容物の大きさは問わない。

埋められた土器の範囲であるが、地上に一部が露出している場合でも、地面に何らかの加工を施して設置してある事例に関しては埋設土器として収集した。しかし、偶然の発見などで学術的調査がなされていない遺構、穴などの設置装置が設けられていたか否か不明な場合、あるいは床面出土例は取り上げないこととした。

尚、先行研究⁷で持ち運び用の根拠とされた把手付土器、埋納用の専門容器とされた注口土器、有孔罎付土器・台付土器・トロフィー型土器などの特殊土器、隠蔽の装置とみなされた蓋付（石蓋・土器蓋等）土器の場合は内容物がなくともこれを収集し、論考の中で随時参考資料として取り上げることとする。

調査範囲は前回の調査で検出数が多かった関東地方と、縄文時代の遺構が集中して見られる中部高地を併せた関東甲信地方とした。対象時期は、埋納土器の出土例が多く見られた縄文時代中期後葉から後期初頭にかけてとした。土器編年で言い換えると加曾利E式期を挟んだその前後で、今から5000年ほど前の中期中葉の勝坂期から後期初頭の堀之内期まで、およそ800年間がその対象期間である。

対象へのアプローチ法としては、収集資料の分析結果をグラフ・図表に加工し、データを可視化することを考えた。漠然として判りにくい縄文時代ではあるが、グラフを用いることで埋納土器が出現した一時期をより鮮明に見やすくすることを心がけた。

改めて用語の定義をしておこう。胞衣容器や幼児埋葬用甕棺として認識されている埋甕という呼称を用いることは、読み手に用途を限定した遺構を連想させる恐れがある。このため該当時期に検出される埋設土器に関しては、報告書の記述引用以外は埋甕の呼称を用いず、埋められていた土器全般を埋設土器と総称することとした。

明らかに埋葬用と考えられる土器内に副葬品としての物が残っていたケースを除き、内容物のある埋設土器に関しては埋納土器と称することとする。しかしながら、埋葬用か否か判断しかねる事例もある。その場合は総て埋納土器として取り扱った。

本論の構成は全4章とした。第1章第1節で長野県から東へと地域別様相を俯瞰し、第2節の分布と変遷で埋納土器の初現を探り時代による変化を追う。第2章第1節では内容物の分類と分析を行う。第2節で屋内外での検出傾向と住居形式別の内容分析を行い、第3節では内容物に違いがあるのか、地域性は認められるのか、集落址における埋設土器

保有率はどうかであったかなど、住居址との関連でその傾向を探る。第3章において、第1章、第2章のデータを基に埋納土器の特性を明らかにし、従来の埋甕とは区別すべき遺構であるか否かを考察する。

第1章 埋納土器の分布と変遷

第1節 地域別事例と概要

蓋付土器、把手付土器、注口土器、特殊土器等の単独埋設を入れて収集してみると、「物を入れ埋めた土器」の報告例は予想以上に多く150例を超えた。しかし、土器の周囲を土器片で囲う被覆土器、物を置いた上から土器を被せ埋めた逆位の埋設土器、数個体を積重ねた複合遺構など判断に迷う事例も多く見つかった。

被覆土器に関しては、土器を入れて埋められた外側の土器が、経年劣化で破片となったとも考えられるが、報告書からそれが読み取れない場合もある。そこで、報告者が「入子状に」と記している事例は収集するが、「別個体の土器片で囲むように埋設」「土器を破片で被覆し」等と、外側の土器について最初から破片・土器片と報告している事例に関しては、被覆土器とみなして取り上げないこととした。

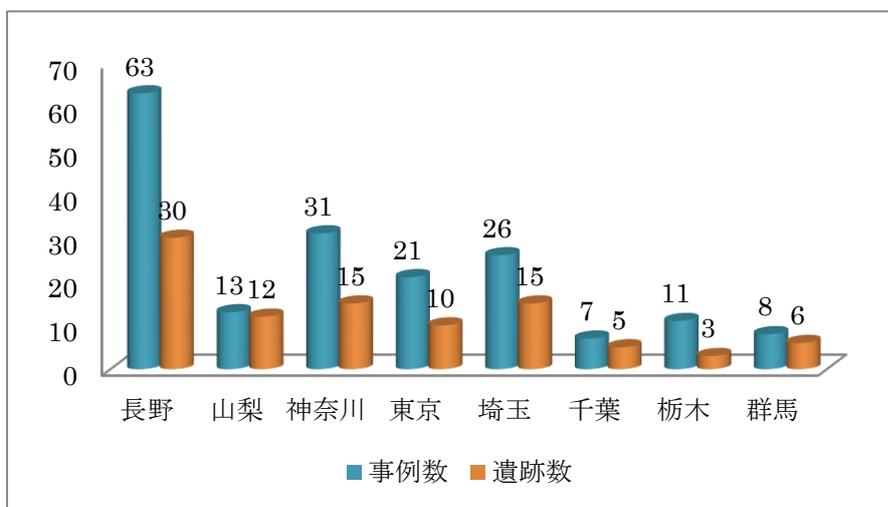
埋設土器は口縁部が上を向いた正位だけでなく、横向きの横位、角度を持って埋められた斜位、底が上になった逆位など様々な出土状況を示す。伏甕とも呼ばれる逆位の土器は、死者の顔面に被せる被覆葬の出土例が多いため埋甕とは又別のジャンルとして取り扱われている⁸。又底が上では「入れる」という前提条件を満たしていないとも考えられる。

本来なら項目を分けて検討すべきところであろうが、土坑内に物を置き、それを隠すように土器を被せ埋めるという使い方は埋納土器とも

一脈通じるものがある。小形の土器や磨石が内部から検出されるなど貴重な資料も多いため、こちらは逆位であることを明記した上で分析の対象として残すこととした。複合遺構も同様に資料として収集した。

こうして埋設土器遺構として集めた全 129 遺跡 342 例と、その中から埋納土器だけを再集計した 101 遺跡 179 例の両者を用いて分析を行う。全遺跡は住所と報告書を加えて（付録表 1）遺跡データとし、3 桁の通し番号をつけた。本文中遺跡名の後に (#) で挿入してあるのが遺跡番号で、分布図上の数字はこの遺跡番号を示す。

埋納土器だけの収集データを地域別に集計すると、縄文時代の遺構が多いことで知られる長野県が 30 遺跡 63 例と約 4 割を占め他地域を圧倒していた。次いで多かったのが神奈川県、埼玉県、東京都といった南関東地域で、一都二県を合わせると 41 遺跡 77 例と長野県を上回りほぼ半数を占めている。報告例が多かった両地域の上に位置する山梨県では、遺跡数では東京を上回っているものの事例数はやや少なめである。中部高地の曾利式土器文化圏と南関東の加曾利式土器文化圏、両者をつなぐ立地環境にある同地域の特色がどんなものであったのか、次節で述べることとする。



(グラフ 1) 遺跡・事例数－地域別

同じ関東でも東端の千葉県、北関東の群馬県と栃木県では報告例が少なく、茨城県にいたっては埋納土器の検出例を見つけ出すことができなかった。これにはどんな背後関係があるのだろうか、各地の様相を詳しく見てみよう。

1) 長野県

長野県は報告例が多いので、北・中・南と 3 地域に分け紹介する。北東信では北から、高山村八幡添(#001)、長野市宮崎(#002)、小諸市郷土(#004)、松本市葦原(#005)の 4 遺跡。諏訪湖・八ヶ岳西麓を擁する中信では、塩尻市小丸山(#007)、岡谷市志平(#008)、同六地在家(#009)、同花上寺(#010)、諏訪市十二の後(#011)、荒神山(#012)、茅野市高部(#014)、同茅野和田(#015)、同よせの台(#17)、同立石(#018)、同尖石(#019)、同聖石(#021)、同長峯(#022)、原村居沢尾根(#023)、富士見町藤内(#026)の 15 遺跡。南信では天竜川に沿って北から伊那市城平(#031)、宮田村中越 2(#033)、同高河原(#034)、駒ヶ根市大城林(#035)、同辻沢南(#036)、飯島町尾越(#038)、松川町庚申原 II(#040)、同中原 I(#041)、高森町増野新切(#042)、同瑠璃寺前(#043)、南木曾町戸場(#045)の 11 遺跡で、計 30 遺跡 63 例を集めた。

分布が集中しているのは、南信を流れる天竜川流域と諏訪盆地・八ヶ岳西麓・南麓地域である。天竜川は諏訪湖を水源とし、伊那谷を形成しつつ流れて遠州灘へと注ぐ 213 km の流路であり、良く発達した河岸段丘上に県内最多 2600 余ヶ所の遺跡が発見されている。東海・西日本的色彩の濃い土器出土の遺跡が顕著⁹なことも、県内他の地域とは異なる特徴である。

背後に黒耀石を産出する霧ヶ峰・八ヶ岳山塊を持つ諏訪周辺地域の縄文時代の特徴を、「石器原料としての良質な黒耀石を求める人々が先土器時代以来往来し、学術的にも貴重な遺跡が多い。特に八ヶ岳西南麓に展開する縄文時代中期集落は、質・量ともに長野県の「縄文時代の宝庫」を象徴しており、「井戸尻文化」の中核を成している」と長野県史¹⁰が述べているように、この地域は屋内石組遺構が発達し、又2点の国宝土偶¹¹を輩出するなど独自の文化を誇っている。

両地域を擁する長野県域の埋設土器は、他の地域より出現時期が古い、円形住居址からの出土が多い、石蓋を設けた遺構が多い、石組・石壇・積石といった祭壇状の空間構造を持つ住居がある、等の特徴が見られる。住居址内に見られる石組・石壇・積石等の施設は他地域との比較及び住居址との関連項で何度か触れることになるので、今後は屋内配石遺構と総称することにする。

埋納土器を伴う屋内配石遺構検出数は180例中6例であったが、その内5例が長野県下からの出土である。又、土偶・石棒・立石など祭祀的要素が濃い遺物の併出が延べで25例報告されているが、土偶と石棒の併出事例もあり重複を避けると21例となる。長野県に次ぐ埋納土器検出数を持つ神奈川県であるが、屋内配石遺構資料は相模原市川尻中村遺跡の44号住居址から1例の報告があるのみである。長野県以外のすべての地域を合わせても土偶の併出は4例、石棒の併出は12例、立石の併出は6例だったことを考えると、長野県地域の住民が埋納土器に託した祭祀性の高さ¹²が窺える。

県内の遺跡に目を向けると、南信の天竜川流域と中信の諏訪湖・八ヶ岳山麓地域とでは土器形式や屋内遺構の在り方などに違いが見られる。

伊那地方と呼ばれる長野県南部は、天竜川が作った河岸段丘上に遺跡が連なっている。東海地方の影響が強いこの地域では、土器も八ヶ岳周辺で盛行していた曾利式とは異なった形状・文様をとるものも多い。資料の中で特筆すべきは、瀬戸内地方で盛行していた船元 1 式¹³系土器が埋納土器として利用されていた駒ヶ根市大城林遺跡の屋外特殊遺構¹⁴だ。収集データ中最古¹⁵の資料だったこの事例に関しては、次節「埋納土器の初現」で取り上げる。

伊那谷で最近発掘された埋納土器として注目すべきは、宮田村中越 2 遺跡の小型壺内蔵土器であろう。同遺跡は天竜川右岸の長峯状の台地上に位置し、縄文時代前期から晩期まで長期にわたって形成された戸数 400 軒を上回る大規模な集落遺跡である。この遺跡の 403 号住居址出入り口付近から、小型の壺が内蔵された埋甕が検出されている。

日本初の縄文中期集落全掘として有名になった茅野市尖石遺跡の周辺では、八ヶ岳の裾野という拘束の少ない立地を背景に 116 住居址を持つ聖石遺跡、239 軒を誇る長峯遺跡のような大規模な縄文集落がみられる。隣接する両遺跡は中期中葉から後期初頭まで営まれた集落で、その期間は概期とほぼ一致する。長峯遺跡で勝坂期に登場した入口部埋甕は長続きせず、曾利期後半に入って再登場しその後は一般化するという。

聖石で 36 例ある埋設土器遺構で、石蓋付は 7 例、両耳壺埋設 1 例、埋納土器例は 3 例。隣接する長峯遺跡では、80 例の埋設土器遺構中、石蓋付 6 例、両耳壺埋設 1 例、入子埋設 1 例、埋納土器は 2 例のみであった。長峯遺跡では炉址は検出されているものの、住居址プランが不明な住居址が 7 割と多くその中には小形の土器が入った 1 例も入っている。

貴重な埋納土器例ではあるが、住居プラン不明では住居址関連データには含めることができない。これは残念であった。

屋内配石遺構は長野県全 143 例中 12 例あったが、東信の郷土遺跡出土例を除く 11 例がこの地域から報告されている。屋内埋設土器との関連は重複を含め、石蓋を伴うものが最も多く 7 例、埋納土器が 5 例、台付土器やトロフィー型土器など特殊土器との併出が 3 例であった。特筆すべきは、埋納土器が発見された屋内配石遺構を持つ 5 軒の住居址総てが八ヶ岳山麓からの検出であったことである。

一例をあげ屋内配石遺構の性格を見てみよう。5 例中最古、原村の居沢尾根遺跡例では「完形の有孔罎付土器¹⁶が上に倒れこんだ石棒に口縁部をつぶされたような状態」（青沼 1981）で検出されている。曾利 1 式期の有孔罎付土器内に、「内面漆黒色で炭化物が内外ともに付着している深鉢」が入れられていた 7 号住居址例である。

この住居址の南東壁下に、幅 2.2m 奥行 20-30cm 床面との比高差 +7cm の周溝に囲まれたテラス部が、南壁下には拳大以上の石を両側に積んだ間に平石を据えた石組があり、ここにも石棒が置かれていた。青沼氏は「柱の前に立てられていた石棒（内 1 本の前に内部に深鉢を入れた有孔罎付土器が埋めてある）、石組、テラス状部」といった出土状況に、「祭礼的性格というものが強くうかがえる」と結んでいる。

では、祭祀的な埋設容器として用いられた有孔罎付土器とはどういったものなのか、先行研究¹⁷でどう扱っているかに少し触れておこう。縄文時代前期後葉の中部高地に初現を持つと言われるこの土器は、口縁の直立する樽形を呈し口縁部に沿って小孔が穿たれ頸部に罎を持つ独特の形状をとる。中期後葉になると、器形的に壺形に変化し容量も小さく

なる。変遷過程の中で有孔罎付注口土器、把手付土器と形状を変化させつつ両耳壺との共存時期を経、やがて両耳壺だけになり有孔罎付土器は消滅する¹⁸。その両耳壺の、器形変化の最終段階が注口土器であるという。

注口土器埋設の事例はごく少ない。加曾利 E 式期後半から後期初頭にかけての遺構から検出されることが多く、全 343 資料中わずか 10 例を数えるのみであった。長野県と千葉県での検出例はないが、山梨県、神奈川県、東京都、埼玉県から各 2 例、栃木県と群馬県から各 1 例の合計 10 例である。

有孔罎付土器の変化形である両耳壺を埋設したものは 18 例見られ、長野県全 143 埋設土器例に占める割合は 13% である。お隣の山梨県では 22 例中 7 例であるから比率は 32%、それに注口土器の 2 例を加えると有孔罎付土器系の山梨県内出土比率は 4 割をこしていた。

2) 山梨県

山梨県の検出例は、北杜市姥神(#046)、同甲ッ原(かぶつつばら)(#047)、同梅之木(#049)、韮崎市石之坪(#050)、甲府市上野原(#052)、笛吹市桂野(#053)、笛吹市釈迦堂(#054)、富士吉田市上中丸(#055)、大月市大月(#056)、都留市中谷(#057)、同尾咲原(#058)、上野原市小和田(#059)、の 12 遺跡 13 例で、県中央部の甲府盆地には少なく、長野県と裾野を分ける八ヶ岳南麓台地、及び神奈川県と相模川で結ばれた山梨県東南部地域に点在している。

山梨県の地域特性は、南関東と中部山岳地域とを結ぶ回廊のようなその位置にある。一例として、敷石住居が検出された中谷遺跡と大月遺跡の報告書を見てみよう。山梨県初の柄鏡形敷石住居址が検出されたの

は都留市の中谷遺跡である。その 2 軒の内の 1 軒、2 号柄鏡形住居址からは石鏃埋納土器が検出されている。同遺跡では加曾利 E4 式土器¹⁹と曾利 5 式土器²⁰が共出²¹し、中部高地と関東の文化圏が共存する様相を呈しており「文化圏の接点であるという地理的性格が敷石住居址の発生を促したのではないか」（長沢 1996）と考察している。

報告書が出されたその翌年、中谷遺跡の北にある大月遺跡で 11 軒の敷石住居址が検出された。曾利・加曾利両形式の土器も併出しており、中部高地系と関東系が混在する様子が確認できたのは中谷遺跡に次ぎ 2 例目であるという。県内敷石住居確立期の資料が何れもこの地域だったことは、都留市地域が県内敷石住居址の初現地であることへの裏付けとされている。

甲府盆地にも敷石住居址は見られるが集落を成す状況は見られないとして、大月遺跡報告書には「加曾利 EIV 式期の集落を構成する状況は笹子峠を超えていないことが浮き彫りになり、改めて山梨県東部地域が関東と中部高地との接点であることがうかがえる」（長沢 1997）と述べられている。東西の交流に関しては論考の中で随時触れることにする。

この時期に気候変動があり中部高地が寒冷化して暮らしにくくなっていったであろうことは多くの報告書が触れている。それに加え自然災害もあったであろうことが、上中丸遺跡報告書内「白色粒子と降灰現象」という小論でわかった。内容は富士火山由来の降灰現象が集落に与えた影響である。住居址に残る降灰は加曾利 E2 式期直後にあったと考えられ、これをきっかけに「住居址内立石遺構が出現、集落は衰退、住居址数も減少していった」、「活発な火山活動などによる自然環境の変化や、

人々の意識に大きな影響を及ぼす現象が縄文時代中期後葉期に著しかったことを示唆しているといえよう」²²と記述している。

山梨県内の遺跡における降灰の記述は、注口土器²³内から石斧と黒曜石が検出された、富士吉田市の上中丸遺跡の遺跡調査発表要旨の中に見つけることができた。奇しくも同じ遺跡名である。要旨には「後期前半に降下したとされる火山灰を確認」（篠原 2008）²⁴とある。その後晩期に入ると富士の火山活動は非常に活発になるという。この遺跡からは又、埼玉県塚越向山遺跡²⁵に次ぐ全国で 2 例目の「磨製石斧と黒曜石原石がセットになって土器に納められた」事例が報告されている。いずれも時期は中期末葉で、両者とも注口土器に入れられていた事例であった。

長野県で多かった石蓋付埋設土器だが、山梨県ではその検出数は少ない。県内初の発見となったのは釈迦堂遺跡 S-IV-SB78 号住居址で、出入口部に立石と石蓋付埋設土器が検出された。この発見を受け「石蓋は山梨県下では少なく 1987 年現在初めての発見。(中略)立石・石蓋・埋甕という要素が重なった住居址は県下の概期の住居址としても特異」(小野 1987) と報告している。その後報告例も増え、今回は韮崎市石之坪遺跡、北杜市甲ッ原遺跡、大月市大月遺跡、都留市中谷遺跡の 4 遺跡からデータを集めることができた。

興味深いのは、甲府盆地を見下ろす丘陵地帯に近接する 2 つの遺跡、笛吹市釈迦堂遺跡と御坂町桂野遺跡で同じような形状の、ミニチュア土器を内蔵した埋設土器が検出されたことだ。内容物に関しては第 2 章で分析するが、小形の土器は神奈川県の川尻中村遺跡や長野県伊那地方の中越 2 遺跡、同じく長野県松本平の葦原遺跡からも報告されている。類

例が少ないだけに、離れた地域に点々と検出例があるのは地域の交流を考える意味でも興味深い。

小形土器内蔵の埋納土器は県下韮崎市の女夫石遺跡からも出土していた。まだ調査中の遺跡ということでネット情報²⁶だけであるが、屋外に埋められた曾利 2 式期土器の中から底部穿孔²⁷の小形土器底部が検出されている。底部穿孔の様子は画像から判るが、サイズなど詳細は不明である。

通常使用より小さめの土器に関しては、ミニチュア土器、小形土器、小型土器、などと表現されている。ミニチュア土器は「日常的な土器に比べて極端に小さな土器」(小林 2002)²⁸と定義されているが、小形・小型土器とは具体的にはどこが違うのかその判別は難しい。従って、両者を取り上げる時の呼び方は、総て報告書の記述をそのまま用いることとした。又、小形土器・小型土器と表記が異なる小さめの土器については、報告書の記述以外は小形土器と統一することにした。

3) 神奈川県

長野県に次ぎ検出数の多かった神奈川県域では、川崎市潮見台(#060)、同初山(#061)、横浜市羽沢大道(#063)、同三の丸(#064)、同玄海田 No.3(#065)、綾瀬市上土棚(#066)、相模原市同新戸(#067)、同上中丸(#068)、同当麻 No.3(#069)、同田名花ヶ谷戸(#070)、川尻(#071)、同川尻中村(#072)、伊勢原市下北原(#074)、同三ノ宮・下戸(#075)、清川村北原 No.9(#076)、同久保の坂 No.4(#077)、の 15 遺跡、30 事例が集まった。

遺跡が集中しているのは、山中湖に源を發して相模湾へと注ぐ相模川流域である。相模川は延長 109 km の一級河川でその流域には上流の山

梨県側から順に、上中丸、中谷、尾咲原、小和田原遺跡が、神奈川県に入ってから、川尻、川尻中村、田名花ヶ谷戸、当麻 No3、上中丸、新戸と主要遺跡が連続する。

多くは加曾利 E 式末葉期から後期前葉の称名寺・堀之内にかけての遺構で、相模野丘陵、台地、河岸段丘上など小高い場所に位置している。住居形態は柄鏡形住居址が 14 遺跡と半数を占め、次いで隅丸方形住居址が続く。長野県で多かった円形住居だが、この地域では相模原市川尻中村遺跡の 2 住居址のみであった。この円形住居址からは前述の屋内配石遺構が検出されており、埋納土器を伴う屋内遺構としては関東地方で唯一の報告例となっている。ちなみに長野県の 5 例の内 2 例が円形住居址からで、残り 3 例は隅丸方形住居址からの検出であった。

初期の遺構としては川崎市潮見台遺跡の 10 号住居址例がある。同住居址では改築の際、周溝を広げて打製石斧を収めた土器を埋めており、建築儀礼が行われたと推定されている（伊東 1971）。

神奈川県下の代表的な中期遺跡例として、15 例の報告がある相模原市の上中丸遺跡を取り上げる。標高 76.5～79.0m の段丘面に営まれた同遺跡は、多くの遺跡が分布する相模川流域に位置する住居址数 123 軒の中期集落址である。この遺跡では中期中葉後半の勝坂期に集落の形成が始まり、後葉の加曾利期前半に盛行期を迎え、後半に住居址数の減少と集落規模縮小がおこり、後期に入ると終焉を迎えている。多少のずれはあるものの、加曾利 E 式期の中で盛行と衰退期を迎え、後期には消滅する中期集落の様相は、該当地域の他の遺跡でも同様であった。集落生滅に関しても上中丸遺跡は、中期縄文集落の代表例と言えよう。

中期後葉期の同集落では、加曾利 E 式土器集団と曾利式土器集団とが大きく 2 つのグループに分かれて居住している。加曾利 E 系土器と曾利系土器の出土比率は 6:4 で、加曾利 E 系土器が優勢だという。その中で埋設土器には異系統の土器を使用することが多いことが報告されており、「埋甕が他の土器を意識して使用するといった概念を持っていることのあらわれと理解できる」（三ツ橋 1994）と述べている。

埋設土器に異系統の土器を使用する例は他の地域にも見られる。離れた地域の例として、屋外埋設遺構に瀬戸内系の土器を埋めた長野県大城林遺跡例、「古い時期の埋甕 2 例が西関東系の土器であることは興味深い」（後藤 1996）と報告された栃木県槻沢遺跡例などが挙げられる。

初現と推定される長野県の大城林遺跡例は勝坂期であるが、槻沢遺跡例はそれから 4～500 年隔たった加曾利 E 式期終末の住居址からの検出だ。時代も地域も異なる両者の間に埋設土器に対する共通概念が存在していたとするなら、形態としての埋設行為だけでなく、それに付帯する意識も又伝播していったことになる。

ここで再び上中丸遺跡に話を戻そう。同遺跡の土器埋設の風習は下溝 III 期（曾利 1 式期）に初現し、中期後葉前半に確立期を迎えて盛行し、下溝 VII 期（加曾利 E4 式期）まで継続している。上中丸遺跡で収集した 15 例の内埋納土器は 3 例、入子土器は 4 例、石蓋を持つ埋設土器は 8 例であった。特異だったのは入子土器出土の 52 号住居址で、南壁溝内にある埋甕 1 の横に長さ 24 cm の扁平な礫が立石状態で検出されていることである。

立石とは円柱状の石を立てた状態で検出される遺構で、土偶・石棒同様に祭祀的要素が濃いとされている。長野県下では屋内配石遺構との

併設が 3 例見られた。神奈川県下で見られる立石に関し、「白色粒子」の解説の中に興味深い報告があった。立石を伴う住居址が富士火山起源の白色粒子降下以降に出現しており、加曾利 E2 式期直後に堆積した降灰現象と合致するように集落の膨張が止み、衰退化に向かったという記述である。

同様の立石検出例は、相模原市寺原遺跡 2 号住居址と同川尻遺跡 J2 号敷石住にもある。前者は 2 つの炉を持つ隅丸方形プランの住居址で、東壁際に設けられた被覆埋設土器と 2 つの炉を結ぶ延長線上に、長さ 60 cm 太さ 20 cm の円柱状大形礫を立石として用いている。後者は張出部に両耳壺が埋設された柄鏡形敷石住居址で、主体部との連結部張出部側から 2 つの立石が検出されている。上中丸遺跡と寺原遺跡例は同時期、川尻遺跡例は両者より遅い加曾利 E4 式期の住居址であるから、神奈川県下の立石出現時期は確かに富士火山噴火後の現象と言える。

4) 東京都

東京都域で埋納土器が検出されているのは、武蔵野市御殿山(#079)、調布市上布田(#080)、同飛田給(#081)、小金井市前原(#082)、府中市武蔵台(#084)、同武蔵台東(#085)、立川市向郷(#087)、稲城市多摩ニュータウン No.9(#088)、八王子市多摩ニュータウン No.72・795・796(#089)、町田市忠生 A 地区 A2 地点(#092)の 10 遺跡、21 事例である。尚、多摩ニュータウンは以後多摩 NT.と記す。

資料が多かったのは、多摩市・稲城市・八王子市にかけて大規模な宅地開発が行われた多摩 NT 地区で、この中から南関東地域では最も古い勝坂期の土器を用いた埋設事例が報告されている。

この地域最古の埋納土器が発見されたのは稲城市の多摩 NT.No.9 遺跡で、中期中葉の勝坂式土器に入れられた磨石が屋外埋設遺構から出土している。屋外埋設遺構は、都内全埋納土器 21 例中 8 例あって比率は 38%、そのほとんどが加曾利 E4 式期の遺構である。その中の 2 例は石斧が納められた土器であった。

石斧埋納土器は、武蔵野市御殿山、府中市武蔵台、立川市向郷、稲城市多摩 NT.No.9 の 4 遺跡から計 6 例の報告があり、これは 5 例だった長野県を押え収集データ中最多であった。

府中市武蔵台遺跡と立川市向郷遺跡のケースは集落外の遺構で、前者は集落址から 250m、後者は 60m ほど離れた場所からの出土である。武蔵台遺跡で使われた土器は加曾利 E 式土器の中でも珍しい瓢箪形の注口土器で、内部の石斧は使用痕のある定角式磨製石斧 6 点であった。向郷遺跡の土器は器高 36.3 cm 口径 26.5 cm のほぼ完形の深鉢で、中から礫 4 点打製石斧 1 点の他小石と土器片も検出されている。両者とも加曾利 E 式期後半の所産である。

その他の 4 例は住居址から検出されている。都内最古の埋納土器が報告されていた稲城市多摩 NT.No.9 遺跡では、98 号住居址、106 号 a 住居址、109 号住居址の 3 軒から、武蔵野市御殿山遺跡では 1 号住居址から出土している。では両遺跡の状況を少し詳しく見てみよう。

多摩 NT.No.9 遺跡は前期後半期に集落形成が始まり、加曾利 E2, 3 期が中心期で埋設土器も盛行し、加曾利期末に終焉を迎えている。関東地方では珍しい土偶の出土も中心期に見られ、3 軒の石斧収蔵土器もこの時期の住居址からの検出である。

その中の1軒、加曾利 E3 式土器に石斧が埋納されていた 98 号住居址を代表として紹介しておく。径 5.65m の円形住居址南西壁際に埋設された器高 24 cm 口径 22 cm の土器内には、打製石斧の他有孔鏝付土器の破片も入れられていた。長野県の項で触れた、後に両耳壺・注口土器へと器形変化する前の特殊土器である。この住居址内の土器は、曾利式が卓越するものの加曾利式と曾利式が混在し、埋納土器と有孔鏝付土器は曾利式土器であった。多摩 NT.No.9 遺跡では上述 3 軒以外に、114c 住居址から完形の石鏝入り埋設土器も見つかっている。

神奈川県事例で触れた立石だが、東京都下の検出例は小金井市前原遺跡と立川市向郷遺跡で見いだせた。両遺跡とも、富士火山の降灰現象が見られた加曾利 E2 式期より後の住居址である。前原遺跡 4 号住居址は加曾利 E3 式期の埋納土器を検出した柄鏡形の住居址で、「埋設土器を伴う南・東コーナーと、立石を伴う北・西コーナーとに左右二分」(小田・伊藤・C.T.Keally1976) しているという珍しい出土状況であった。向郷遺跡 SI-14 住居址は柄部に両耳壺埋設遺構がある加曾利 E4 式期の柄鏡形敷石住居で、主体部北東側に長さ 55 cm の長大な自然石を用いた立石状の遺構が存在していた。

5) 埼玉県

埼玉県域では、志木市西原大塚第 67 地点(#094)、さいたま市広ヶ谷戸稲荷越(#095)、同会ノ谷(#096)、同裏慈恩寺東(#098)、同下加(#099)、同大宮バイパス No.5(#100)、同指扇下戸(#101)、北本市上手(#102)、鴻巣市赤台(#103)、上福岡市ハケ遺跡 C 地区(#104)、日高市宿東(#106)、深谷市台耕地(#108)、寄居町露梨子(#109)、寄居町東(#110)、小鹿野町塚越向山(#111)の 15 遺跡、26 例である。

遺構の出現時期は加曾利 E 式前半から後期前葉で、初現は加曾利 E2 式期の埋納土器が検出された西原大塚第 67 地点遺跡例と台耕地遺跡例であったから神奈川県例より古い。しかし盛行するのは神奈川地域同様、こちらも加曾利 E 式後半であった。

この地域で目立つのは把手がついた両耳壺の埋設である。両耳壺埋設全 64 事例の内 17 例を数え、該当 8 都県では長野県の 18 例に次いだ。しかし全体数が 143 例と多い長野県の場合は、県内埋設土器に占める両耳壺埋設の比率は 13%に過ぎないが、埼玉県では 40 例中の 17 例であるから 43%と、実に 4 割強が両耳壺埋設であった。54 例中 5 例を検出した神奈川県では約 9%、39 例中 9 例であった東京では両耳壺埋設比率が 23%であるから、北上するにつれ両耳壺の受容が深まる傾向が見える。

両耳壺埋設を持つ住居址であるが、屋外遺構の 3 例を除く 14 例総てが加曾利期後半に出現した柄鏡形住居址からの検出であった。この内半数の 6 例が柄部先端部、2 例が接続部埋設土器であったから、住居址内埋設両耳壺の実に 7 割が柄部関連部位に埋設されていたことになる。

これらのデータからは両耳壺が柄部埋設用土器として好まれ、注意深く取り扱われていた傾向が見えるのだが、同じ埼玉県下でも 2 例を検出した北本市上手遺跡では柄部ではなく住居部分に埋設されており、報告書には「当遺跡では両耳壺の先端部埋設を回避した傾向が認められる」（上手遺跡 1989）と記されている。好んだにせよ回避したにせよ、この地域の人々が両耳壺に何か意味を持たせていたのは間違いない。

両耳壺埋設にはある種の規制が働いていたであろうことが、把手である土器の耳部分の埋設角度にみることができる。貴重な情報だと思うのだが、耳の角度に着目してくれた報告書は少なく、さいたま市下加遺跡

40号住居址、日高市寺脇遺跡2号住居址、同7号住居址、日高市宿東遺跡A56号住居址の4例で記述されているにすぎなかった。炉址と柄部を結ぶ主軸線に対し耳状把手が直交するように埋設していたのが、下加遺跡と日高遺跡例、平行に埋設しているのが、宿東遺跡例だった。以上わずか4例であるが、主軸線直交埋設の方が平行埋設より多かった。

6) 千葉県

千葉県域では、松戸市陣ヶ前(#112)、同曾谷貝塚(#113)、市川市権現原貝塚(#114)、市原市祇園原貝塚(#115)、同武士(#117)、の5遺跡で7例のデータを集めた。陣ヶ前遺跡と武士遺跡以外は貝塚遺跡である。

海に囲まれた千葉県は、「海水準変動と地殻変動の影響を大きく受け、(中略)約7000～4000年前の東京湾の水面は、今より約3m高かったと推定されている」(千葉県史2000)²⁹。これは概期にも重なり、上述の遺跡のほとんどが当時の海岸線に位置している。貝塚遺跡が多いという立地もあり、埋納品も他地域では見られない物が含まれていた。

千葉県北西端、下総台地西南部に位置する松戸市の陣ヶ前遺跡2号住居址では、貝や魚骨が入れられた斜位の埋納土器が検出されている。報告書によるとその内容物はイボキサゴ、ハマグリ、サルボウ、アサリと、他にマガキやオオノガイも加わった貝の小片や魚骨が少量、そして焼土と炭化物が多量に含まれていたという。独特なのは貝交じりの土の上に獣骨とチャートが乗っていたことで、記述には「土の上に獣骨の一部が斜めに置かれ、さらに土を挟んでその上にチャートの大きな礫が骨に平行するように置かれていた」(大塚・須賀2000)とあった。

同じく下総台地西南部の市川市権現原遺跡19号住からは、入子状埋設土器の間から鹿角が検出されている。報告書によると19号住は北東

部に張出部を設けた柄鏡形住居址で、埋甕 2 基（使用された土器は 3 個体）を伴っている。入子土器は柄部に埋設されており、「埋甕 1 における鹿角の検出状況は、住居の改築等に際しての儀礼行為を想起させる注目すべき資料である」（花輪 1987）とある。

鹿角の埋納は陣ヶ前遺跡の貝の埋納同様他に例がなく、特異である。鹿角に関しては市川市曾谷貝塚 D 地点の 4 号住居址から、16 点の鹿角が発見されている。「鹿角の出土は、市川市の貝塚においては、従来きわめて乏しいものであった」（堀越 1977）と述べていることから、その稀有性が窺える。

千葉県下では、多くの埋葬人骨が検出されており、縄文時代の葬送習慣を探る貴重な資料を提供している。埋葬と土器との関連を、中期中葉から後期まで集落が見られた加曾利南貝塚例で見てみる。全 31 体の人骨の内、加曾利期に属するものは 1 体もなく、堀之内期に属するものが最多の 14 体となっている。その内幼児骨を納めた甕棺土器の検出は 3 体とあった。確かに幼児埋葬用に土器を使用はしている。

では、住居址との関連ではどうであろう。ここでは、「住居址の床面上またはごく近辺から人骨が発見された例は、4, 5 例にすぎない。（中略）大半の人骨は、ほとんど住居址とは無関係な位置から発見されている」（後藤 1976）³⁰と、居住地域と貝殻投棄地、そして埋葬地点を分けて生活していたと報告している。

住居址から骨片内蔵の埋設土器が検出された曾谷貝塚の報告者は、骨片が入っていたが故に「幼児甕棺説は（中略）否定的であるといわざるをえない」（堀越 1977）と述べている。理由は、「A 地点で 2 体の新生児の骨を調査しているが、保存状態が不良にもかかわらず、多くの残存

部位を残していた。この埋甕は骨片を残しうる条件を持つにもかかわらず、埋葬による各部位保存が認められなかった」からで、各貝塚発見の同様事例に関しても「同一の文化系統に属する埋甕を考える場合、幼児埋葬以外の目的による埋置を考えるべきであろう」として、地域・文化系統が異なれば、埋設土器の用途も又異なる可能性があることを示唆している。

内容物はなかったが、対ピット間で検出された貝の花貝塚 2 号住の埋設土器に関し関根氏は「この種の埋甕で人骨の検出されたものは皆無である。貝の花貝塚では、住居外埋甕に埋葬遺体が検出されたものも多いが、住居内の例については検出されなかった」と報告し、土器片をもって被覆した住居内埋葬の殿平賀貝塚例を「これを直ちに土器を埋置した埋甕と同様に扱い、埋甕の性格一般にまで及ぼすのは若干の問題がある」（関根 1973）³¹としている。

千葉県域の事例は少なかったが、他地域では出土例が少ない人骨の調査報告は、埋納土器の性格分析には欠かせない貴重な資料となった。

7) 北関東地域

栃木県での報告例は宇都宮市上欠(#118)、小山市寺野東(#119)、西那須野町槻沢(#120)の 3 遺跡から 11 例を集めたが、茨城県における埋納土器報告例は残念ながら見つけ出すことができなかった。

北関東は東北地方の影響が強い地域と言われているが、埋納土器に関してはどうであろうか。栃木県の場合、埋設土器遺構の出現時期は「大木 8b 式期から堀之内式期」と対象時期とほぼ一致しているのだが、11 例全てが屋外の埋設遺構であった。埋設土器以外の屋内施設はというと、概期のこの地域では東北地方で盛行していた複式炉が一般化していた。

土器を利用した火壺と石組で構成された炉であるから、当然炉址には土器が埋設されている。しかしながら長野や南関東で見られるような屋内埋設土器はあまり見当たらない。

屋内祭祀の伝播については「縄文時代中期後半に中部地方や西関東から那須地方に伝播してきたと思われるものに、石棒・立石・埋甕・伏甕などの屋内祭祀が挙げられる」（後藤 1996）と述べている一方、埋設土器については骨片入り埋設土器が検出された上欠遺跡報告書で「本県では屋内埋甕は受容されず、屋外土器埋設遺構が急激に増加する。（中略）遺構分布は一ヶ所に集中しており、集団墓としての要素が濃い」（上欠遺跡報告書 1985）と報告されていた。

寺野東遺跡例では被熱礫が入れられた 30 号埋甕、土器内に焦土が見られた 63 号埋甕など火と関連深い遺構も見つかっている。被熱した遺構は他地域には余り見られないことから、この地域の特徴と言っても良いだろう。

南関東の盛行期からやや遅れて栃木県域に伝播してきた埋甕祭祀は屋内遺構としては受容されず、屋外の墓域で用いられるようになっていった。これが判ると、栃木県下で屋内埋設土器の報告例が少なかったのが頷けた。栃木県下における埋設土器は、葬送と深く結びついて定着したようだ。

群馬県内で埋納土器が出土しているのは、前橋市荒砥前原(#121)、渋川市小室(#122)、同三原田(#123)、同行幸田山(#125)、藤岡市白石大御堂(#127)、松井田町白倉下原(#129)の 6 遺跡 8 事例が挙げられる。その多くが、中期後葉末から後期初頭にかけての遺構であった。

群馬県は関東平野の北端部に位置し、利根川経由で南東関東地域や新潟地域と、吾妻川を介して長野県とそれぞれ結ばれる。谷川山塊が眼前に迫る渋川市はその最北部にあたり、赤城山西麓には三原田遺跡のような大規模集落も出現している。

三原田遺跡は標高 280m の赤城西麓台地に広がる集落で、中期前半期から後期初頭期かけて営まれ住居址 243 軒が発掘されている。住居址数が多いので期待したのだが、埋設土器の検出自体が少なく全体で 61 例、そのうち埋納土器は皆無だった。埋納土器以外の収集対象遺構で報告されていたのは、石蓋付が 5 例、入子土器 2 例、両耳壺埋設 1 例の 8 例であったが、入子に石蓋、両耳壺に石蓋の複合例を含むので、全体で 6 例の検出であった。

同じく渋川市の行幸田山遺跡は、勝坂期から加曾利 E 終末期まで営まれた集落址で 40 軒の住居址が発掘されている。ここでの埋設土器報告例はわずか 3 例で、埋納土器は 7 号住居址からの 1 例のみであった。埋納土器例では住居址南東部より「幼児の頭位の亜角礫が 1 点入れられていた」(大塚 1987) 土器が検出されている。現高 19.5 cm、口径 23 cm、胴部径 18 cm の深鉢で、加曾利期後半の E3 式期の土器であった。

群馬県下では内蔵品のある埋納土器より、付帯施設としての蓋石を持つ埋設土器や入子埋設、両耳壺の単独埋設の比率が高かった。両耳壺は 22 事例中 5 例の検出で、入子土器と並んでそれぞれが全体の 23% ずつを占めている。これは東京都と並び、埼玉県の 43% に次ぐ両耳壺埋設比率の高さであった。出土状況を高崎市白川傘松遺跡 II-1 号住例でみると「耳の位置は主軸線直交に近い」(関根 1995) とあり、埼玉県の直交検出例と近似する所見を示していた。

住居形式は円形住居 1 軒に対し敷石住居址 1 軒、柄鏡敷石形住居址は 5 軒で、隅丸方形や方形の住居址からは検出されていなかった。円形住居址以外、すべての住居址は敷石を持つ住居であった。

第2節 分布と範囲

1) 分布

収集した概期の土器形式は、関東地方の加曾利 E 式と中部高地の曾利式がほとんどであったが、中には新戸 1 期、下溝 III 期、宿東 3 期など遺跡名をつけた土器形式で時期区分を行っている場合もある。地域によって使用土器が異なっているのは当然のことではあるが、時期の統一ができないと変遷や分析に支障が出る。収集データの時期別並び替えのため、出土土器を加曾利 E 式と曾利式に比定して³²参照表（付録表 2）を作った。それを再び新地平編年³³に比定して置き換え、当論考で使用する新地平併記の編年表（表 2 右下）を決定した。

収集データを新地平編年に置き直して並べ替えると、勝坂期の新地平 8 から堀ノ内期の新地平 15 までの全 8 区分となった。報告書記載の土器形式と新地平編年とを併記して、年代順に並び替えたものを基礎データ（付録表 3）とした。作図・内容物の分析など、総てこのデータを基にしている。

以上の作業をして新地平編年で並び替えた資料を、

- 1 期：加曾利 E 式期前の勝坂・井戸尻期
- 2 期：加曾利 E1・E2 式期
- 3 期：加曾利 E3・E4 式期
- 4 期：加曾利 E 式期以降の称名寺・堀之内期

と4期に分けた。1期間がそれぞれ200年間として、約800年間の動きを追うことになる。加曾利E3式期は200年ほど続き、他の時期より長いのだが期区分わけでは同じ扱いとした。当論では以降、この4期区分を基準とする。尚、参照表は当論考にのみ用いる便宜的もので、厳密な土器編年ではない。

作表したデータを基に、最初に行ったのは分布図の作成である。4期区分した101遺跡の緯度経度を計り、1期黄色、2期オレンジ色、3期赤色、4期黄緑色と色分けして地図上に落とした(付録図1参照)。俯瞰すると調査範囲の全域に広がってはいるが、長野県域と関東地方南部域は密でそれ以外の地域は薄いことがわかる。特に茨城県は、検出例が見いだせなかったため空白となっている。

長野県と神奈川県には集中的にみられる反面、曾利・加曾利両文化圏の接点に位置する山梨県ではやや少ない。関東東端の千葉県では、東京湾岸の県西域に数例検出されているだけで、それより東からの報告例はなかった。

分布の傾向を見ると、天竜川、相模川、利根川といった一級河川沿いに遺跡が点在しているのがわかる。特に天竜川流域、八ヶ岳西南麓、相模川流域、利根川河口域等に遺跡が集中しており、当時の交流ルートが河川であったことがうかがえる。

2) 埋納土器の初現

収集データ中最古の土器は、長野県駒ヶ根市大城林遺跡で検出された瀬戸内系の船元I式系土器であった。標高700m前後の段丘上に位置する遺跡は、中期中葉の藤内期から後葉初期の曾利期までと比較的古い時代の住居址が発掘されている。下半部をロームに埋め込んで直立した

浅鉢の中から石が検出された埋納土器はその集落初期の遺構、中期中葉藤内～井戸尻期の住居址に挟まれた屋外の特殊遺構だった。

「口縁部に X 字状の中空の把手を上部で連結させて飾る」と表現された土器について吉村氏は「浅鉢は瀬戸内地方に盛行する船元 I 式土器を想起させる、あまり類例のない土器であった。特異な土器として注目したい」（吉村 1974）と報告している。同様の土器が出土した伊那市の月見松遺跡報告書には「月見松 II 式土器（中期中葉）に瀬戸内地方から船元式土器の系統が流入してくる傾向が認められる」（藤沢・林 1968）とあった。船元 I 式の土器編年は関東・中部の五領ヶ台期で、これは縄文時代中期初頭にあたる。

初期の屋外遺構³⁴については、岡谷市海戸遺跡から大形深鉢単独埋設が報告されている。「埋甕と言われる施設は曾利期に盛行するが、曾利期初期の土器で住居址外のある場所に施設されたこの大埋甕はおそらく埋甕の初現であろう」（宮坂 1968）と述べ、「住居址外の特殊な地点にあった埋甕施設が、その後住居址内に入っていくらしいが、それは今後の問題提起としたい」と結んでいる。住居址外から住居址内への動きは、前節で述べた埋納土器の出現傾向とも一致している。

大城林の報告者はその海戸例を引用し、「船元 I 式類似土器は、当地方に埋甕が盛行する時期より早いことは確かである」（福沢 1974）と述べている。関東・中部の五領ヶ台期に編年される船元 I 式であるから、類似形であっても大きく時期がずれることはないと考えられる。月見松遺跡の報告例も加味し、大城林遺跡出土の埋納土器を勝坂中期に置いた。繰り返しになるが、収集データ中最古の土器である。

加曾利 E 以前の出土例として、東京都稲城市の多摩 NT.No.9 遺跡で藤内式土器が、長野県茅野市高部遺跡と同富士見町藤内遺跡で井戸尻式の埋納土器が報告されており、この時期の事例は合計 4 例となった。最も古い土器を含む 3 例が長野県であったことから、埋納土器の初現地は長野県域と考えるものである。

3) 変遷

埋設土器の初現や盛行時期に触れている報告書は多くはないが、その中から初現地と見られる長野県と他地域の報告例を見てみよう。まずは長野県から始める。月見松遺跡は「曾利 1 期、加曾利 E1 期に屋内埋甕の風習盛行」（藤沢・林 1968）、洞遺跡からは「加曾利 E 期において竪穴東南部の入口近くに土器を埋設する風習は生じていなかった」（原・藤沢 1971）、曾利遺跡では「曾利 1 式期終末に埋甕手法が侵入したもので、埋甕の存在という最も新しい特異性を示している」（武藤 1981）、八幡添遺跡から「加曾利 E3 期から敷石・埋甕普遍化」（小林 1984）等の報告がなされている。

変遷史の資料として興味深いのは、集落内の住民の移動を考察した「茅野和田遺跡における縄文中期集落址の分析」（宮坂 1971）³⁵である。長野県茅野市の茅野和田遺跡は、谷を挟んで東西の台地が向かい合う環境に立地している。

縄文時代中期初頭に西台地で営みを始めた住民は、中葉には東台地に移り、末葉には再び西台地に移住するというように、定期的に移村していた。井戸尻期に西台地に移っていた集団が、曾利 2 式期に東台地に戻ってきた。宮坂氏によると、「しばらくぶりに東台地上に移ってきた住

居址を見ると、(中略) 住居址中に埋甕施設という特徴的なものが3棟に出現してくる」。そしてこれが、茅野和田集落の埋甕初現だという。

伊那地域では加曾利 E1 式期以前に埋甕習俗を受容していたが、その北にあたる松本盆地ではまだその風習は生じておらず、伊那谷でやや衰えが見え始めた頃、諏訪・八ヶ岳山麓での盛行期を迎えている。茅野和田集団が埋甕を持って東台地に移ったのもこの頃である。しかし、同じ八ヶ岳山麓の曾利遺跡では曾利 2 式期集団は埋甕習俗を受容せず、曾利 3 式期³⁶においても持たない住居の方が多かった。埋甕習俗の受け止め方には地域差があり、一様でなかったことがうかがえる。

次に他の地域の様相である。遺跡集中地帯である相模川流域の当麻 No.3 遺跡では「加曾利 E1 期に埋甕初現、加曾利 E2 式期以降屋内埋甕盛行」(山本 1977) と報告されており、近接した上中丸遺跡では「加曾利 E2 期に付属施設である埋甕が出現」(三ツ橋 1994) とある。時間差は少しあるものの、この地域では加曾利 E2 式期には埋甕風習を受容していたことがわかる。

東京都の武蔵台遺跡の報告書は「埋甕は加曾利期後半になって急増する」(坂詰 1996) と述べており、東京都域でも神奈川県とほぼ同時期に埋甕の受容と盛行があったと考えられる。

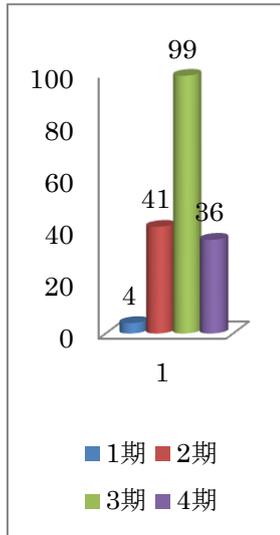
東北の影響が強いとされる栃木県では、埋納土器を持つ遺跡はそれほど多くはない。住居址内の埋納土器にいたっては皆無だった。数少ない埋設土器出土住居址を持つのは、栃木県北部の那須塩原に位置する槻沢遺跡である。同遺跡の住居址検出の埋設土器について「住居内埋甕の古い 2 例が西関東系の加曾利 E3、4 式であることは興味深い」(後藤 1996)

と記述している。加曾利 E 式期末には土器と一緒に埋設行為も伝わっていたことがこれではっきりした。

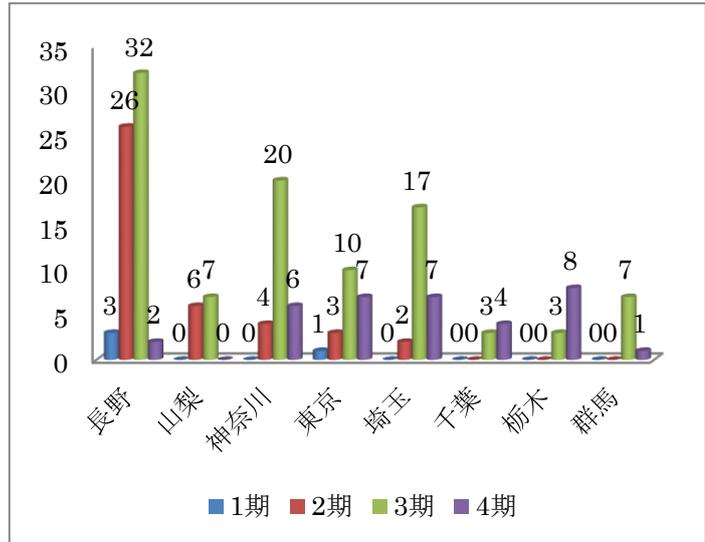
群馬県では、前橋市の荒砥前原遺跡 3 号柄鏡形敷石住居址から入子土器が検出された。埋甕を伴う加曾利 E4 式期の住居址 2 軒が柄鏡形を呈すると思われる敷石住居であり、このことは「本遺跡においても加曾利 E 式期に至って住居形式が変化することが明らかになった」（藤巻 1988）としている。

加曾利 E 式期以前に埋甕風習を受容した長野県伊那谷の、その風習が衰退を始める頃に八ヶ岳山麓で受け止められ、神奈川県では加曾利 E 式期前半に埋甕が出現して盛行し、東京都では加曾利 E 式期後半になって急増し、栃木県・群馬県では加曾利 E 式期後半に出現していた。これらの報告例をつなぐと、長野県南部に初現を見た土器埋設の習俗が、徐々に東へ北へと広がっていく様が見て取れる。

ではデータ上ではどう出ているであろうか、4 期区分でデータを組み直しグラフにしてみた（グラフ 2）。1 期の検出は屋外 3 例屋内 1 例と合わせても 4 例だったものが、2 期には 41 例、3 期には 99 例と飛躍的に数を増す。しかし、この 3 期をピークとして縄文後期の 4 期には 36 例と急激に減少している。2 期、3 期に区分した中期後葉の加曾利 E 式期を合計すると 140 例で、検出比率は 78% となった。全体の 8 割弱がこの時期に集中していることになる。



(グラフ 2) 4 期区分



(グラフ 3) 地域別埋納土器事例数

地域性を見るためデータを編集し、都県別のグラフ（グラフ 3）にした。8 都県の内 6 地域で 3 期にピークがあるが、千葉県と栃木県では後期に入った 4 期にそのピークがあって、他地域よりやや遅れて盛行していることがわかる。前半 1、2 期の検出率は長野県が 45%と最も高く、次いで山梨県の 33%、東京都 15%、神奈川県 13%、埼玉県 8%と続いている。しかし、千葉、栃木、群馬の各県では 1、2 期の検出例はなかった。

地域別の変遷グラフからは西高東低の様相と、長野から離れるほどピークの時期が遅くなっていることが読み取れる。変遷図（付録図 2～5）を辿ると、2 期 3 期に遺跡が集中していた中部高地と南関東が 4 期に入ると過疎化してしまう流れが見える。埋甕など屋内祭祀は中部高地や南関東地域から北東関東地域に伝播していったと言われているが、埋納土器においても同様の傾向が見てとれた。

第2章 内容物と住居址

第1節 内容物の分析

1) 内容物の分類

石斧や黒耀石が多いただろうと予想していた内容物だが、それらを押え最も多かったのは土器を入れ埋めた例だった。土器が入っていた、と言っても出土状況は様々である。形状を残した一般土器を入れる以外に、明らかに小形サイズの土器やミニチュア土器を入れた例、マトリョーシカのように土器の中に土器を入れ重ねる入子埋設例、同一個体の土器片、把手の一部を入れるなど多様な例が報告されていた。

ミニチュア土器を入れ埋めたケースは3例と少なく、山梨県東部と神奈川県西部の両県境付近に見られるのみである。長野県域では小形土器や他土器の底部埋納のケースが多く、3期に急増する入子埋設土器は関東地方南部に多いことなど、土器埋納事例には地域性や時期による変動の可能性が感じられた。以上の理由から、土器埋納事例を土器埋納、入子埋設、土器片埋納の3つに細分することにした。

しかしながら、土器埋納と入子埋設の出土状況は似通っており、特に写真資料のみでの判別は難しい。従って、「入子状に」「2個体重ねて」と記述してある事例は入子に、「小形土器が入っていた」「明らかに入子とは異なる」などと報告している場合は埋納土器に分類した。他土器の底部が入っているようなケースは埋納土器事例とした。

これらを踏まえて内容物を、自然石、黒耀石、土器、入子、土器片、石器を含む石製品に分けたのだが、石製品の集計段階で長野県からは石鏃の埋納事例が報告されていないこと、石斧埋納は長野県と東京都に多

いことなどが認められた。石器埋納には地域性が出そうだと考え、石製品をさらに分けることにした。石製品とは自然石を人為的に加工したもので、軽石製品、石棒、垂飾品、石器類などの総称である。石器とは石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錐、石皿、磨石などの生活道具類を指し、利器と記される場合もある。報告書に用いられる礫とは、加工されていない自然石のことである。

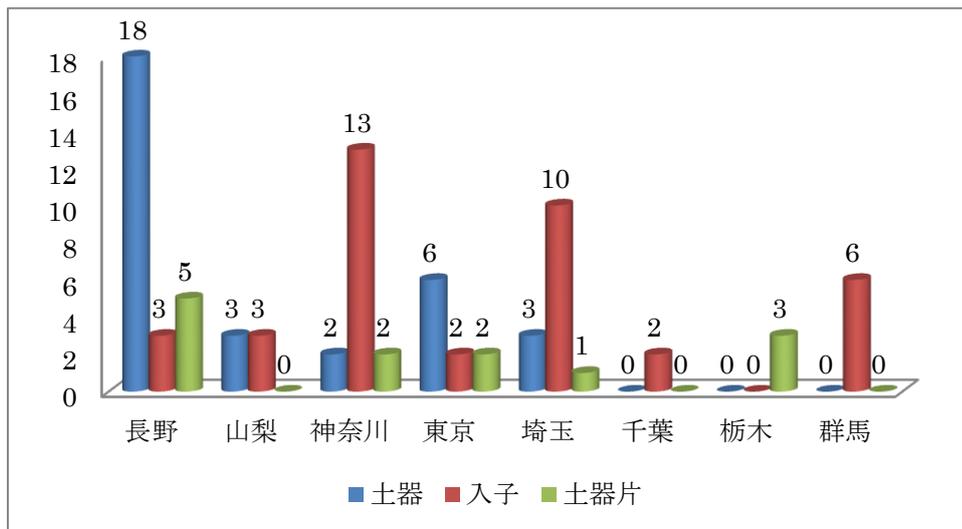
この石製品の中から、地域性が出そうな石斧と石鏃それぞれに独立した項目を与え、それ以外の石器・石製品を1項目とした。以上埋納品を、土器類内で3分類、石製品内で3分類、自然石では黒耀石とその他の石で2分類し、全8項目に分けた。尚、千葉県下で検出された貝殻や鹿角など、上記8項目に当てはまらない物はその他の項目に入れてある。

集計の結果は、石斧18例、石鏃10例、その他の石器・石製品25例、土器34例、入子38例、土器片12例、黒耀石21例、自然石41例、その他3例の計202例となった。内容物の数であるが、礫と石斧と土器片、黒耀石と土器片、入子土器に鹿角など別種が複数個納められていた例もあったため、埋納土器事例数より多くなっている。

検出数が多いと予想していた石斧・石鏃であったが合計28例で全体の14%であり、その他の石製品を足しても54例と全体の26%を占めるに過ぎなかった。石製品以外の埋納品では、土器・土器片・入子を統合した土器類は42%、石・黒耀石など自然石は30%となり、両者ともに石製品より高い比率を示した。何を入れるかに地域性が認められるのかどうか、土器類から順に見ていくことにする。

2) 土器埋納と入子埋設

埋納品として最も多く用いられていたのは、破片も含む土器類であった。中でも入子は事例のほぼ半数を占める。これを地域別に編集すると、長野県では土器埋納が 18 例と多く、県内土器類埋納例に対する比率はほぼ 70%になる。南関東では全般的に入子埋設が土器埋設を上回っており、神奈川県 76%、埼玉県 71%と両県で顕著だ。両県に挟まれた東京都では土器埋設が入子埋設を上回り、長野県と似た傾向を示している。北関東の栃木県では土器片のみ、群馬県では入子土器のみが見られ、隣り合う両県でも埋設土器の受容のあり方が異なっていたことをうかがわせる。



(グラフ 4) 土器類－地域別事例

長野県土器埋設の特徴は、土器・他土器底部の埋納がそれぞれ 6 例と多かったことが挙げられる。他地域で土器を入れた例は、山梨県釈迦堂遺跡 S-III-SB39 号住居址と同桂野遺跡 1C 号竪穴住居址のミニチュア土器、神奈川県川尻中村遺跡 44 号住居址のミニチュア土器、東京都忠生 A 地区 A2 地点の小形土器など数例であった。

ミニチュア土器は日用品と比べて極端に小さな土器で、儀礼・玩具・副葬品等の用途が推定（小林 2002）されている。現在では何らかの儀式に用いられた儀器とみなす傾向が強い³⁷。長野県棚畑遺跡出土の 70 個ほどのミニチュア土器はその約 80% が住居跡からで、土偶や土製円盤とセットで検出される事例が多いという。縄文時代中期の八ヶ岳西麓における住居廃絶儀礼行為を、「ミニチュア土器を他の儀器とセットで配し供献の意味合いの強い儀礼を行い、住居を埋めながら何かを燃やしながら更に儀式をする」（功刀 2008）³⁸と推定した功刀氏は、埋甕の祖型とみられる土器埋設行為が井戸尻期に出現したとしている。

釈迦堂例³⁹では 5.4mx4.8m の円形住居址出入り口部の埋設土器内からミニチュア土器が検出されている。外側の土器は曾利古 2 式であり、収集データした土器内蔵出土例の中でも古い時期に属する。しかしながら、これ以上の情報は報告書から得られなかった。

桂野遺跡例⁴⁰は 4.7x4.6m の 1C 号円形住居址からである。同住居址は何度か建て直しが行われた重複住居址で、埋納土器は炉址 A 西側で検出されている。出入り口部埋設例が多い中、炉址の横からの検出は珍しい。曾利 5 式期とされる同住居址からは立石と丸石も出土しており、祭祀性が高い住居址と考えられている。ここでも儀器として取り扱われていた可能性が高い。

最近発掘された宮田村の中越 2 遺跡例は、土器内蔵の意味に迫るなど報告が詳細だったので内容を引用しながら取り上げてみる。同遺跡は天竜川右岸に長期にわたって営まれた大規模集落で、概期の住居址数は 200 軒前後とみられている。小型壺内蔵土器が出土したのは、4.2mx4.0m の隅丸方形住居プランを持つ 403 号住居址出入り口付近からある。器高

34.4cm 口径 26.2cm 底径 8.2cm の深鉢底部付近に「仰向けに寝かせられた状態」で検出されている。

器高 8.6 cm 口径 5.8x4.9 cm の内蔵土器の外観は、「緩やかに盛り上がった隆線が土器の周囲をうねるように廻る」文様が施されており、土器は「表面（正面）と裏面（背面）とに意識的に作り分けられた」可能性が高いとし、「文様の複雑な表面（正面）を意図的に上に向け、何らかの意味を持たせて埋甕の中に設置されたのであろう。（中略）通常使用する土器ではなく、儀礼的な用途で特別に作られた可能性が高い」（小池 2014）⁴¹と結んでいる。

埋甕を幼児・死産児埋葬用と解する渡辺氏はこの土器の文様を「人面」と見、「小型壺の人面は当然死産児を表現している」と考え、「その顔は（中略）真上を向いていて、再入の門戸を見上げていると考えられる」（渡辺 2014）と若干の考察を加えている。「死産児を出入り口部に埋葬し、そこを跨ぐ母親の体内への再生を願う」（渡辺 1980）⁴²行為を、具体的に表現した土器とみなされたようである。

土器内に入れ埋められた小形土器は儀器だったのか、副葬品だったのか、小形土器内蔵の埋設土器報告例が少ない現段階では何とも言い難い。近々の報告例として山梨県女夫石遺跡の小形土器内蔵埋設土器があるのだが、まだ発掘中で提供資料はない。類例の報告を待ちたい。

入子土器の検出比率は神奈川県・埼玉県・群馬県で高い一方、東京都では土器埋納事例が入子埋設の報告例を上回っており、長野県と似た傾向が見られる。千葉県・群馬県では入子埋設しか報告されておらず、栃木県では土器片が入れられた例しか検出されていないなど、土器類埋納に関して明らかな地域差が見られた。

3) 石斧・石鏃と石製品

石斧・石鏃以外の石製品は 25 例あり、全体の 12%を占めている。その内訳は、ナイフ的な機能を持たせた鋭利な利器の石匙・搔器・横刃形石器・スクレーパー類、製粉・調理などの植物加工に用いた磨石・敲石・凹石類、そして石棒などの祭祀用品類と大きく 3 つに分けられた。

埋納品としての比率が高かったのは、鋭利な利器ではなく製粉などに用いられる調理用道具で、磨石 6 例、敲石 3 例、凹石 1 例と計 10 例が検出され最多であった。次に多かったのは鋭利なスクレーパー類で 7 例、そして石棒の 3 例が続く。

石棒が入れられていた 3 例は何れも長野県下の出土である。高森町瑠璃寺前遺跡 3 号住居址は、中軸線上に巾 50 cm に石が敷きつめてある円形プランの住居址で、敷石延長線上の奥壁付近には石壇と埋設土器が設けられていた。口縁部を少し出して埋められた鉢形土器の中に、頭部径 12 cm、底部径 14 cm、高さ 39 cm の石棒が下部を埋められ直立する姿で検出されている。土器より大きくはみ出した内容物は埋納土器としては特殊であるが、欠けた石棒を入れ埋める、埋設土器内に石棒状の自然石を樹立させる、といった事例もあることから石棒埋納の一形態例として取り上げた。この住居址に関し報告者は、「一部敷石を持ち、奥に石壇を作り土器を埋め、その中に石棒を樹立させた特殊な住居址で（中略）、司祭のいた住居址と思われる」（佐藤 1972）⁴³と述べている。石棒祭祀⁴⁴が行われていた可能性が高い。

伊那市城平遺跡 9 号住居址では「上部欠損の埋甕内に石棒片を差し込んだ状態」（宮沢 1973）⁴⁵で出土しており、塩尻市小丸山遺跡 7 号住居址では南東壁際に埋められた土器の中から、石棒状の石器と黒耀石 1

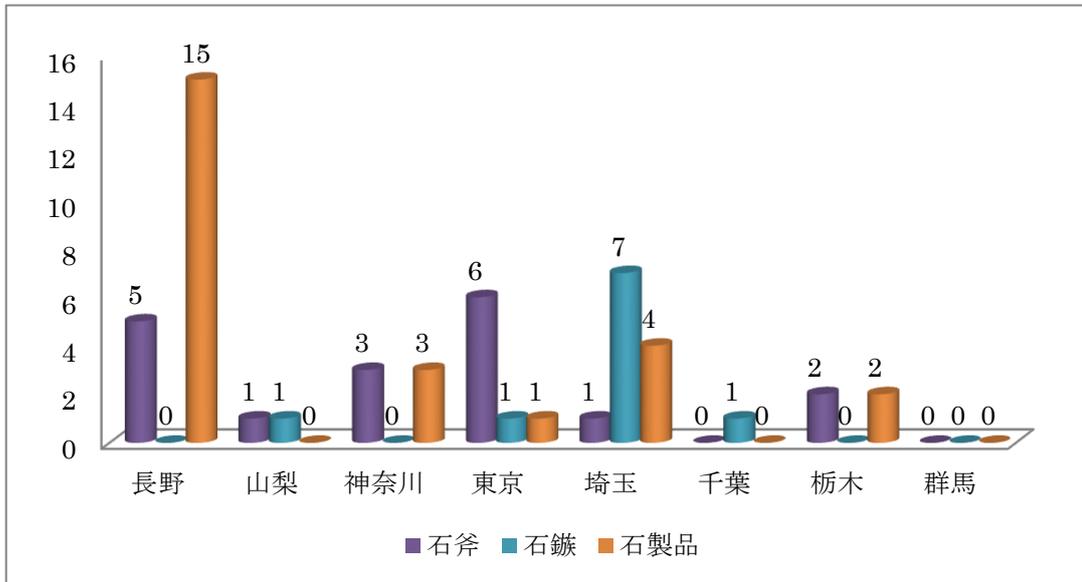
片が検出されている。同住居址東壁際には平石の上に棒状の河原石が重なる遺構があり、その上から首・左手・足部を欠く土偶が上を向いた状態で検出されている。その出土状況を報告者は「平石を土台とし、棒状河原石が直立し、その間に土偶を安置したかのような想定復元も可能」（樋口 1970）と表現している。

土偶と埋納土器の併出は、全体でも 14 例とそう多くはない。同じく祭祀用具とされる石棒併出が、20 例あったことと比べると少ない。また石棒のように土器内に入れ埋められたケースは、調査対象時期・地域では皆無であった。長野県与助尾根遺跡 8 号住居址から、底部欠損の壺形土器内部から土偶の頭部が検出された例があるのだが、こちらは台石の上に置かれた状態で遺存しており、埋設土器内からの検出ではない。14 例中 11 例が長野県域から出土しており、他の 3 例は神奈川県新戸遺跡、同川尻中村遺跡、東京都多摩 T.No.9 遺跡からの報告であった。

石棒と埋納土器の併出は長野県から群馬県までほぼ全域で見られるが、長野 10 例、神奈川県 2 例、東京都 2 例、埼玉県 4 例、群馬県 2 例とやはり長野県の検出数が大きく他を引き離していた。検出時期をみると長野県では加曾利 E 式期前半にも報告例があるが、他地域では加曾利 E 式期末から後期初頭にかけての検出であった。

最後に石斧と石鏃について述べる。石斧は伐採・建築・土堀具、石鏃は狩猟具として、両者とも生産活動にかかわる利器であり縄文時代を代表する石器と言っても良い。石斧が複数個収蔵された土器は、八王子市桜塚遺跡、武蔵野市御殿山遺跡、小鹿野町塚越向山遺跡、綾瀬市上土棚遺跡、富士吉田市上中丸遺跡などで見つかっている。桜塚例は注口土器内に使用痕のない 4 点の磨製石斧が収蔵されていた物で、「宝物的な

扱いを受けたもの」(笹津 1956) 46と報告されている。しかしこの事例は偶然の発見で、住居址との関連や遺存か埋設か等のデータが不足していたため資料としては取り上げなかった。



(グラフ 5) 石製品類—地域別事例

石斧埋納事例は千葉県と群馬県以外、ほぼ全域で報告されている。地域別事例でも触れたが、石斧埋納 18 例の内東京都が 6 例と最多で 5 例の長野県を上回っていた。石製品グラフと土器類グラフで土器埋納と石斧埋納事例数を見てみると、南関東の中でも東京都は北の埼玉とも南の神奈川県ともやや異なる傾向を示している。どちらかというとな長野県に近い嗜好が感じられる。

石鏃の検出は石斧よりも稀で、わずか 10 例であった。遺跡数も事例数も多い長野県と神奈川県で 1 例も報告されていない一方、埼玉県は 7 例と全体の 6 割強を占めており、石斧や他の石製品より石鏃を埋納品として好んだ傾向が見て取れる。栃木県・群馬県でも長野県・神奈川県同様、石斧埋納の検出例はなかった。

4) その他

ここに分類したのは、松戸市陣ヶ前遺跡 2 号住居址⁴⁷の貝類・獣骨・チャート埋納土器、市川市曾谷貝塚 D 地点⁴⁸の貝殻片と骨片、同堀之内権現原 19 号住居址⁴⁹の入子・鹿角埋納土器の 3 例である。

獣骨と貝類埋納の土器が検出された陣ヶ前遺跡 2 号住居址は一部分の発掘であり、柱穴の状態から円形住居址であったと推定されている。柱穴の並びにあるピットは住居内部に向かって斜めに穿たれており、あらかじめ土器を設置するために用意されている。埋められていたのは後期初頭称名寺式の深鉢で、「貝類交じりの土の上に獣骨の一部が斜めに置かれ、土を挟んでそれと平行するように大きなチャート礫が置かれていた」(大塚・須賀 2000) という。

曾谷貝塚 D 地点の 2 号住居址は径約 4m の円形プランを持つ。住居址の西南壁際に埋められた称名寺式土器の中は灰と貝殻交じりの土で充たされ、その中に骨片が含まれていた。骨片が検出されたがゆえに「幼児甕棺説には否定的」(堀越 1977) とする報告者の意図を重く受け止め、各事例を吟味しながら第 3 章で考察したいと思う。

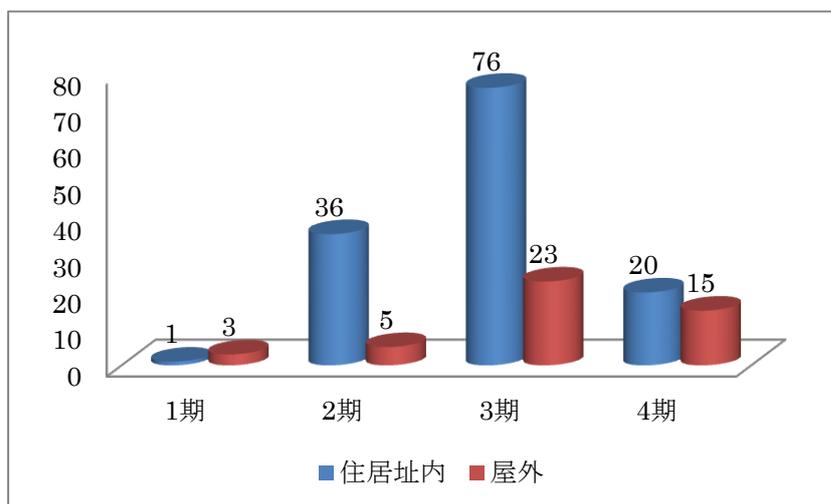
堀之内権現原遺跡は下総台地西南部に位置し、周辺には多くの遺跡が点在している。鹿角埋納土器が報告された権現原地区では 21 軒の住居址が検出されており、加曾利 E4 式期にあたる 19 号住居址は柄鏡形に属している。同住居址は 2 基の埋甕を保有しており、入子・鹿角埋納土器が検出されたのは柄部で、2 基の埋甕は何れも主体部側へ斜位で埋設されていた。鹿角は上下の土器に挟まれたような状態で検出されており、「住居の改築等に際しての儀礼行為を想起させる」(花輪 1987) 資料と考えられている。陣ヶ前遺跡の報告者は「獣骨の一部を入れている点、

その上を覆うようなものが置かれている点では共通するとも考えられる」
(大塚・須賀 2000) と所見を述べている。

第2節 住居形式と埋納土器

1) 屋外から屋内へ

住居址との関連を調べるため、180 の事例を住居内と屋外検出事例とに分けてみた。結果 133 例対 47 例と住居址からの出土が 74% を占め、埋納土器と住居址との関連の深さがうかがえた。特に 2 期では 41 例中 5 例と、実に 88% が屋内からの検出であった。



(グラフ 6) 住居址内外事例数

4 期区分でデータを組み直してみると、1 期では 75% が屋外にあって住居址内検出がわずか 1 例であった埋納土器が、2 期に入ると住居址内埋設例が 36 例と大幅に増加している。一方の屋外遺構の伸びはほとんど見られず 5 例にとどまり、その比率は 12% に落ちている。

埋納土器のピークでもある 3 期に入ると住居址内事例が倍増すると同時に、28% が再び住居の外に出るようになり、4 期では 43% が屋外の遺構となっている。特に住居址内埋納土器が検出されていない栃木県で

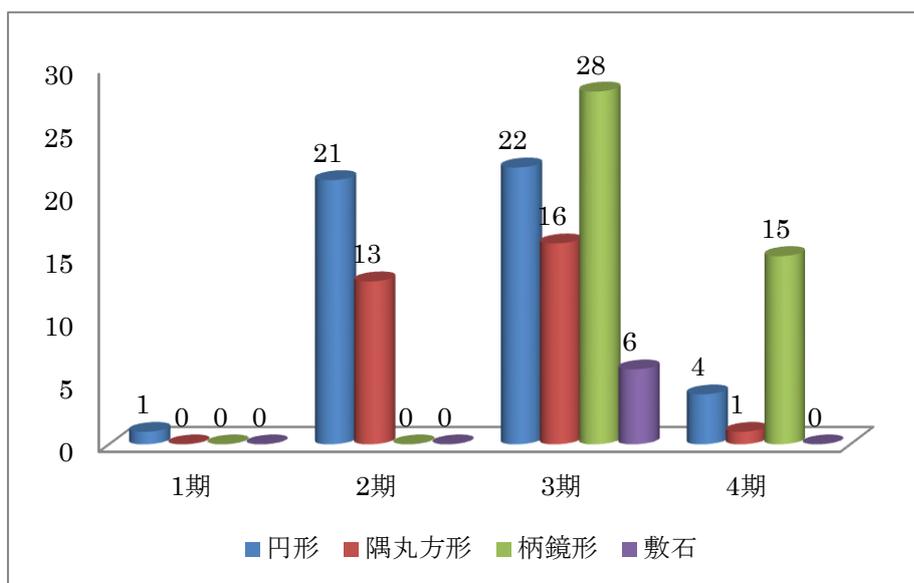
は、屋外検出率は 100%であった。埋設場所の設定にも地域性、もしくは何らかの規制が働いていたことが窺える。

これらのデータから、最初は屋外施設だった埋納土器が、加曾利期に入ると住居内に埋められるようになり、加曾利期の後半から後期初頭にかけて又屋外へと移行していく傾向が読み取れる。

2) 住居形式別検出例

住居址の形態と埋納土器には関連があるに違いないと推測し、住居址別に内容物をまとめてみた。これを基に埋納土器の特性を探ることにする。分析の対象とした資料は住居内埋納土器 133 例のうち住居プラン不明の 6 例を除く 127 例で、住居形式は、楕円・不整円を含む円形住居址、五角形・六角形を含む隅丸方形住居址、柄鏡形住居址、敷石住居址の 4 項目とした。尚敷石住居址であるが、形式不明の住居址であっても敷石を確認できた場合は敷石住居に分類した。しかしながら、その多くは柄鏡形であった可能性が高い。

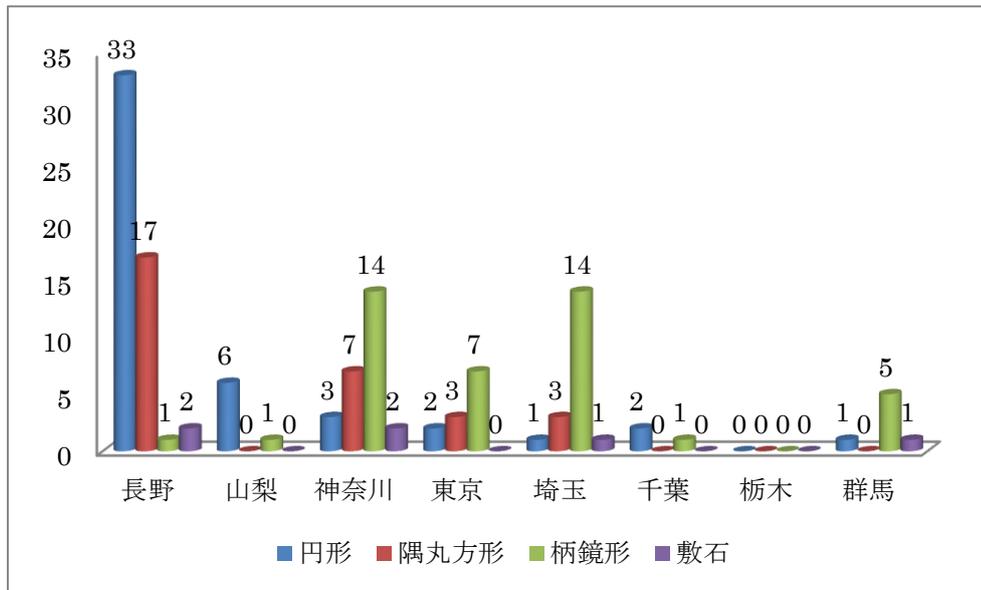
縄文時代中期には大規模な集落が発掘されているが、中期後葉に入ると分散化・小規模化の傾向が出てくる。台地・山麓・河岸段丘など小高い場所に立地していた住居址が徐々に下へと降りていき、後期になると湿地帯への進出が見られるようになる。後期・晩期への橋渡しの時期にあたっているのが概期の縄文時代中期後半である。特に、3 期とした加曾利期後半には新しい住居形態である敷石住居や柄鏡形住居⁵⁰が現れ、住居址の上でも変化が起こったことは明らかである。同じくこの時期、埋納土器資料もまた増加している。



(グラフ 7) 住居址－時期別事例

4 分類した住居形式を、時期区分により並べ替えグラフにした。1 期は円形住居の 1 例のみであったが、2 期には方形の角を丸くしたような隅丸方形住居が加わる。3 期の円形住居址と隅丸方形住居址からの検出数は横ばいで大きな変化は見られないが、新たに出現した柄鏡形住居址⁵¹は初顔ながら両者を上回っている。4 期には円形住居址からの検出数は 1/5 に、隅丸方形住居址は 1/16 と激減するが、柄鏡形住居址の減少率⁵²は両者ほどではなく 15 の報告例があった。この時期 6 例を収集した敷石住居址であるが、前述通りその多くは柄鏡形住居址だったと推測されている。これを柄鏡形住居址に合算すると、3 期における埋納土器検出住居址は柄鏡形が 34 例となりほぼ半数を占めることになる。これらは屋内施設としての埋設土器と柄鏡形住居址の関係の深さを反映しているものと思われる。

次に同じデータを地域別グラフにしてみた。



(グラフ 8) 住居址—地域・期区分別事例

柄鏡形住居址からの検出数が多かったのは 14 例を出した神奈川県と埼玉県で、2 番手の東京では両者の半分の 7 例であり、長野県、山梨県、千葉県では 1 例ずつしか報告されていない。

長野県の 1 例葦原遺跡は、松本平の中央西部に位置する。中期中葉から後期初頭にかけて営まれた、松本平における代表的な集落遺跡の一つである。1964 年から 1979 年までの 11 次におよぶ調査で、徐々にその姿が明らかになっている。中に小形土器の入った埋納土器が検出されたのは 3 号敷石住居址で、第 1 次、第 2 次の調査時であった。炉址の北 80 cm の敷石間に埋められていた加曾利土器 E 式終末期に属する土器内部から、無文コップ状の小形土器が発見され「敷石住居址の性格を考える上で重要な意味を持つ」(小松 1966) ⁵³と報告されている。当初円形と考えられていた住居址だが、後の調査で柄鏡形の形状をとるらしいと推定されるようになった。松本平の中期終末期をあらわす貴重な資料である。

山梨県で埋納土器が検出された柄鏡形住居址は、県東部の都留市中谷遺跡 2 号住居址である。敷石を持つ住居部分は 3.9x3.2m の不整円形

で、最大幅 1.5m 長さ 2.5m の柄部が張り出し柄鏡形を呈している。曾利 5 式埋設土器はその柄部に埋められており、中から石鏃が出土している。石蓋付の埋設土器を調べていく中で、敷石住居は長野県中部高地に多く見られた石蓋遺構がその起源で、徐々に関東地方にと伝播していくと考えるようになったのだが、そうすると通り道である山梨県で検出数が少ないことへの説明ができなかった。その疑問に応えてくれたのが中谷遺跡の報告書であった。

「県内における敷石住居跡の分布について」（長沢 1996P208）⁵⁴で県内検出の敷石住居址 33 軒の分布図を示し「敷石住居の発生については、八ヶ岳山麓から関東地方に波及していくことが以前から指摘されているが、分布をみる限り山梨県においてはそうとは言い切れない」とし、最も古く位置づけられる遺跡には曾利式と加曾利 E 式土器が併出しているとして「県内敷石住居址の発生は八ヶ岳南麓の北巨摩地域ではなく、県東部の南北都留地域にあると考える」と結んでいた。

最後に千葉県の場合を見てみよう。それは鹿角入子埋納土器が検出された松戸市の権現原遺跡 19 号住居址で、5.0mx5.5m の円形住居址部分に張出部が付随する形の柄鏡形住居址である。千葉県では円形住居址が基調で柄鏡形住居址は少ないと言われてきたが、開発発掘が進んだことで報告例が増えてきている。しかしそれは千葉県西部域であって、東部地域には見出すことができなかった。その辺の事情を花輪氏は「中期末葉において関東地方南西部で住居内敷石風習と埋甕風習の発達から生み出されたとされる柄鏡形住居形態の頭部関東への波及は、下総台地西部地域をいわば境界としていたと言える」（花輪 1987）と述べている。

千葉県地域の埋甕に関しては「当概期の柄鏡形住居址には埋甕を伴う例が顕著である」としながらも「各集落には埋甕を伴う住居址と伴わない住居址が混在しているケースが多く、両者の相違に明確な解釈を与えることは現時点では困難である」と埋甕解釈の断定には慎重な姿勢を示していた。

第3節 住居址との関連を探る

1) 石斧と石鏃

住居址別に埋納品の内容を編集しグラフ化（付録グラフ 10）してみると、埋められていた石製品の内容に大きな違いが見られた。円形住居址には石鏃の埋納が 1 例しか見られず、柄鏡形住居址では石斧の埋納はなかった。3 住居址の中では隅丸方形住居址の石斧検出比率が高かった。

磨製石斧は木の伐採や建設具、打製石斧は土堀など植物採集的生産の用具、石鏃は狩猟用具として認識されている。住居址、集落址における石器組成は生業へ結びつくとしてアプローチ研究も進められている分野であるが、ここでは生産活動にまでは踏み込まず住居址との関連だけを見ることにする。

石斧は自然石と並び、他の埋納品より屋外の検出率が高く、18 例中 8 例が屋外遺構からであった。円形住居址から 4 例、隅丸方形住居址から 5 例、敷石住居址から 1 例で、内訳は打製石斧 5 例、打製石斧 4 例、両者の検出 1 例であるから打製石斧と磨製石斧の優劣はつけがたい。両方の石斧が検出されたのは武蔵野市御殿山遺跡例で、打製石斧 2 点と磨製石斧 1 点が同じ土器内に入れられていた。

打製と磨製、どちらの石斧を選択するにあたって選択側の意識は働いていたのか、住居形式別に見てみると、5例が報告されている隅丸方形住居址では内4例が打製石斧と8割を占めていた。円形住居址では重複も含め、磨製石斧3例に対し打製石斧が2例であったからやや磨製石斧が優位であった。屋外埋納例では丁度半々であるから、隅丸方形住居址の打製石斧埋納に対する嗜好傾向は強いと言える。

石斧3点埋納の土器が検出された御殿山遺跡と同じ東京都の多摩NT.No9遺跡からは、出土の6例の内その半数にあたる3基の石斧埋納土器が報告されている。前期後半に居住が始まった同遺跡は多摩丘陵上に位置しており、多摩ニュータウン計画に伴う開発調査で縄文時代中期の住居址50軒が検出された。ここでは98号円形住居址埋甕内から有孔鏝付土器の破片と打製石斧が、109号隅丸方形住居址埋甕内から2つに折れた打製石斧が、106号隅丸方形住居址埋甕内から1/2に遺存した打製石斧が出土している。同遺跡ではその中心期である中期後葉には「埋甕の構築が隆盛」しており、石斧埋納土器が検出された3軒何れもこの時期の住居址である。

隅丸長方形の109号住居址の埋甕内からは、中央から2つに折れた完形の打製石斧が重なった状態で出土している。この土器の性格について報告書は「これは儀礼のための奉納として、埋甕土内に2つに折れた打製石斧が意図的に埋納された行為、いわゆるデポと考えられる」としている。他の石斧入り土器の説明も全く同じものだった。

デポ=埋納については、単数あるいは複数は問わず「意識的に遺物を埋め納めること、その遺跡、遺物。墓への副葬は除く」（佐原1985）⁵⁵、「さまざまな目的のために設置されながらも使用・消費されるまでの間

に猶予期間のおかれた、器物の現象」(田中 1995) ⁵⁶とされている。さらに田中氏はその設置目的から「収蔵」「隠匿」「供献」と3つに分類しているが、それはデポの延長線上に交易・交流を想定⁵⁷しているためと思われる。

しかしながら、両耳壺を「持ち運び容器」とし、その埋設を「掘り出して持ち運ぶため」とする氏の概念を、そのまま埋納土器に持ち込んでも良いのだろうか。デポとは別の観点から石斧埋納土器を報告していた御殿山遺跡の例を取り上げてみる。

御殿山遺跡は井之頭公園内にある遺構で、正位に埋設された石斧埋納深鉢に接し「33x27、厚さ 8cm の扁平の大きな自然石」が「あたかも蓋石の様に」置かれた状態で検出されている。埋められていたのは器高 40.8 cm 口径 31.5 cm 底径 9 cm を計る後期初頭の称名寺式土器で、「特記すべきはこの中から打製石斧 2 個と小形磨製石斧 1 個を検出したことである」(寺村 1965) ⁵⁸と、石斧埋納土器の検出が特筆すべき発見だったことを報告している。

1962 年の調査当時はまだ内蔵品を持つ埋設土器の報告は少なかったようで、報告書に記載されていたのは与助尾根遺跡、尖石遺跡、八王子市桜塚遺跡、船橋市小作貝塚など数例であった。それらの埋設土器の性格について「その在り方、土器の形態、内蔵する遺物の種類により、実用的なものよりもむしろ、宝器的な意義を有するものであろう」とし、「これが石斧である点において、当時の生産に対する或る何物かを感じ得せねばならぬ」と述べている。数少ない類例であるがその何れもが中期後葉から後期初頭の所産であることに着目し「これらの時期におけるかかる傾向について注意すべきであろう」と注意喚起の言葉で結んでいる

が全くの同感である。ある時期に集中して見られる埋納土器敷設行為の裏には、必ずやその行為を促した何らかの現象があるはずである。それを少しでも解明したいと考える。

次に石鏃の埋納例を見てみよう。石鏃は全体でも 10 例しか報告されておらず、内 2 例は屋外の埋設遺構出土である。住居址検出の 8 例中、円形プランの埼玉県台耕地遺跡 31 号住居址、隅丸方形プランの東京都多摩 NT.No9 遺跡 114c 住居址の各 1 例を除く、6 例が柄鏡形住居址から検出されている。その内の 5 例までが埼玉県下の出土である。

残りの 1 例は山梨県中谷遺跡からの報告であった。ここでは 2 号柄鏡形敷石住居址柄部に埋められた、上半部欠損の曾利 5 式土器の内部から石鏃が検出されている。中谷遺跡は相模川上流の桂川河岸段丘上に、後期末から後期初頭にかけて営まれた集落で、発掘された 10 軒の住居址の内 8 軒までが柄鏡形の住居プランを持っており、残り 2 軒は円形住居であった。また、集落の埋設土器保有数であるが、確認されたのは石鏃埋納土器が検出された 2 号住居址と、9 号住居址の 2 軒に過ぎない。埋甕風習が盛行したと言われる時期にあっても、ここでは住民の 2 割しか受容していなかったことになる。

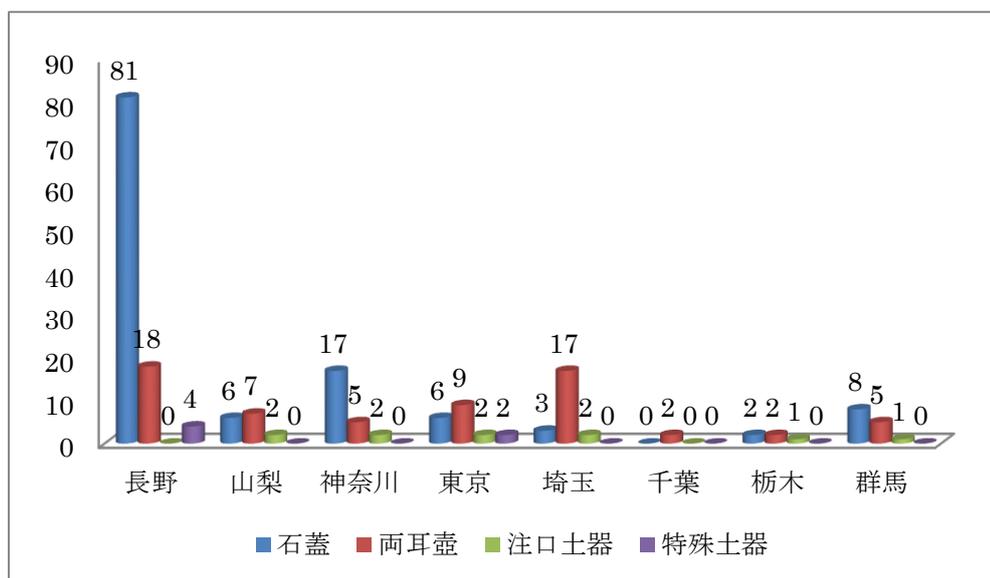
次に埼玉県の例を見てみる。ここでは北本市上手、さいたま市会ノ谷、日高市宿東、深谷市台耕地の 4 遺跡から石鏃埋納 5 例が報告されている。縄文時代中期後半か後期初頭の住居址 14 軒が発掘された会ノ谷遺跡では、柄鏡形 34 号住居址の柄部先端部に 1 号埋甕、主体部に 2 号埋甕と 2 基の埋設土器があり、両土器の中から石鏃片が検出されている。安山岩製の両石鏃片は接合し、長さ 3.1cm、巾 2.3cm、厚さ 0.5cm、重さ 1.8g の元の石鏃に復元された。

同住居址では両埋納土器の線上、主体部との接続部付近から石棒も発見されている。長さ 9.7cm、最大径 4.1cm、重さ 204.1g、緑色凝灰岩製の石棒が柄部と主体部との境目に斜めに立った状態での出土である。

「埋甕および石棒が本遺跡から出土したのは初めて」として「これまでそれらを持たない集落と考えてきた本遺跡において発見された意味は大きい」⁵⁹としている。同一集落内で埋設土器遺構を持つ住居と持たない住居があることはデータが示していたが、集落間においてもその受容に住居間同様の違いがあったことは興味深い。

2) 石蓋と両耳壺

今回集めた資料には石蓋付土器、把手付の両耳壺土器、急須の様に注ぎ口が付いた注口土器、有孔鏝付土器等特殊土器の埋設遺構も含まれている。内容物が入っていない場合は住居址関連の分析の対象にしなかったが、検出数には地域性が見られたので、ここでまとめて取り上げる。



(グラフ 9) 石蓋・両耳壺－地域別事例

123 例の石蓋付土器埋設事例の中で、埋納品を伴う事例は 21 件、入子土器に伴う事例 4 件、両耳壺・注口土器埋設に伴う事例は 7 件であっ

た。地域別にみると長野県が 81 例と全体の 69%、約 7 割を占めている。長野に次ぐ検出数の神奈川県では 17 例であり 14%、3 番手の群馬では 8 例 7%と一桁になる。千葉県では検出されておらず、栃木県も 2 例と少なかった。石蓋土器に関しても、西高東低の傾向が見えている。

注口土器内に埋納品があり、さらに蓋石をしている例はわずか 2 例で、山梨県の上中丸遺跡屋外遺構と埼玉県塚越向山遺跡 6 号住居址で見られるのみであった。両者とも注口土器の中に複数の磨製石斧と黒耀石が納められている事例で、外観も非常に良く似ている。

富士火山扇状地に位置する上中丸遺跡の埋納注口土器は、径約 20 cm の土坑内から検出されている。加曾利 E4 式と見られる器高 10.09 cm 最大径 17.7cm 底径 5.5cm を測る土器の中には、8 点の磨製石斧と黒耀石が納められており石斧の総重量は 594g である。使用痕が顕著という石斧の納め方は、「まず底に刃先を揃えた 3 点を納め、それに直行させた 1 点を載せ、最後にこれと斜交する形で刃先を互い違いにした 3 点を載せる。石斧と土器の間には地山と同じ土が詰まっていた⁶⁰」（篠原 2008）という入念さである。

容器として用いられた注口土器胴部には被熱痕があり、「内部には有機物の付着痕が見られ、使っていた土器を再利用したのは明らか」と言う。石斧の上に置かれていた黒耀石はかなり大きなもので、石斧と合わせると総重量は 1014g になった。

塚越向山遺跡は、群馬県との県境に近い埼玉県西部の山間部にある。6 号敷石住居址の炉址穴に置かれた状態で見つかった。「完形の加曾利 E4 式注口土器の内下部に、定角式磨製石斧 10 点が粘土質の灰褐色土を充填して固定され、その上に黒耀石隕 3 点、黒耀石剥片及びチップ 14

点・チャート剥片 3 点が収納されていた」(小鹿野町教育委員会 1991)⁶¹と入念な収納行為を物語る出土状況が報告されている。上中丸遺跡例同様、塚越向山の土器にも使用痕が見られ「口縁部が被熱により灰褐色に変化し、胴部上半には炭化物の付着が顕著」と、埋設以前に使用されたことが確認されている。

下部に納められていた「若干の使用痕が認められる」石斧の総重量は 1,233g、その上に載せられていた黒耀石とチャート剥片の総重量は 1,026g で、合計すると 2,259g になり、上中丸遺跡例の倍の重さであった。塚越向山例は炉址穴からの検出であり、埋められた土器の範疇には入らないかもしれないが、単に床に置かれたのではなく意図的に炉址内に納めたということデータとして分析の対象にした。

桐原氏が「幼児甕棺の付属装置」⁶²とした蓋だが、その用途はまだ特定されていない。石蓋はそのままの形で伝播・波及したのではなく、敷石にと形状を変え敷石住居として発展したのだと考えられている⁶³。石蓋付土器が敷石住居址から検出された例は 16 例あり、長野県では 6 例で県内出土数に占める割合は 7%、2 番手の神奈川県は 4 例で 24%、群馬県は 3 例で 38%と長野県から離れる程敷石住居に埋設された石蓋付土器が増える傾向にある。

有孔罎付土器の変化形である両耳壺を埋設したものは 64 例報告されている。西から地域別資料数に占める割合を追ってみると、長野県は 18 例で県内全 143 例中に占める割合は 13%、お隣の山梨県では 22 例中 7 例であるから 32%、それに注口土器の 2 例を加えると有孔罎付土器系の山梨県内出土比率は 4 割を超していた。

神奈川県に入ると検出数はやや少なく 5 例となり 9%、東京都 9 例で 38%、埼玉県 17 例で 43%と、南関東を北上するにしたがってその数を増やす。埋設土器に見られるこのような傾向は、有孔鏝付土器が初現地の長野から東へと移動していく中で、両耳壺～注口土器へと形状を変化させていく様を裏付けているようだ。当時の人々が両耳壺や注口土器を埋設土器に選んだのは、有孔鏝付土器が持つ祭祀的な一面を両者が引き継いでいるからに相違ない。

3) 埋設土器の受容と保有

縄文時代の住居には埋甕がセットで付随しているかのような思い込みがあるが、決してそうではなかった。住居址数とそれに伴う埋設土器の数が明確に報告されている遺跡から、いくつか紹介してみる。

日本初の縄文中期集落全掘として有名になった長野県茅野市の尖石遺跡周辺では、八ヶ岳の裾野という拘束の少ない立地を背景に聖石（116 住居址）、長峯（239 住居址）両遺跡のような大規模な縄文集落がみられる。長峯遺跡では勝坂期に入口部埋甕を検出しているが、その後途絶え、再び見られるのは曾利期後半に入ってからでその後埋甕風習は一般化している。一般化と言っても全戸が埋甕を持っていたわけではなさそうだ。その検出比率はどの程度であったか探してみる。

中期後葉から後期初頭にかけての住居址、116 軒が発掘された聖石遺跡では 36 例であったから出土比率は 31%。中期中葉から後期初頭にかけての集落であった長峯遺跡の場合、建替えや時期不明例もあり正確ではないが、およそ 86 例が概期以外の中期中葉の住居址であった。この 86 例と埋甕の有無不明の住居址 46 軒を除くと、概期の住居址は 107 軒

となる。この内、23軒から埋設土器が検出されているので検出比率は21%となった。ここでの埋設土器検出比率は何れも1/3ほどであった。

では伊那谷⁶⁴や北部ではどうであったろう。小形土器埋納土器が検出された駒ヶ根市辻沢南遺跡は100軒の内34軒、11例もの埋納土器が報告されている高森町増野新切遺跡では76軒の内30軒、松本盆地の北に位置する洞遺跡では21軒中5軒で埋設土器が検出されている。屋内に埋設土器を持つ住居は集落のほぼ1/3前後であって、概期の長野県においては屋内埋設遺構を持たない住居址の方が多いと言えよう。

山梨県でデータが明らかだったのは、石蓋付の入子埋設土器が出土した韮崎市石之坪遺跡、大量の土偶が出土したことで知られる笛吹市釈迦堂遺跡、敷石住居址に伴う埋設土器が検出された都留市中谷遺跡の3遺跡がある。石之坪遺跡は32軒中5軒で15%、釈迦堂遺跡は123軒中37軒で30%、中谷遺跡は10軒中2軒で20%であった。

一宮町と勝沼町にまたがる扇状地に位置する釈迦堂は、扇状地上に点在する34か所の遺跡を合わせ、釈迦堂遺跡群を形成している。ミニチュア土器埋納土器が報告されたS-III区では、曾利式期の住居址123軒の内37軒から屋内埋甕が検出されている。30%という数字は周囲の遺跡より高いと思えるのだが、この地域では埋甕の有無は遺跡によって違っており「中には埋甕をほとんど持たない集落というものもある」ため、遺跡群としての埋甕検出率は高くないという。

報告書はさらに山梨県下の石蓋検出の少なさに触れ、埋甕の検出状態、底部の状況、設置場所などに八ヶ岳南麓地域とは歴然とした違いがあると述べている。81例と石蓋検出数の多かった長野県の隣に位置しながら、確かに山梨県下での検出数は6例と少なかった。中部山岳地域か

ら南関東への通り道に位置しており長野県の影響が強い地域と思っていたのだが、釈迦堂遺跡や中谷遺跡の報告書を読むと、あえて八ヶ岳南麓地域とは一線を画していた県西部のあり方が見えてきた。石蓋を受容しなかったことも又、山梨県の地域特性と言えよう。

神奈川県では、地域別事例で取り上げた上中丸遺跡の 122 軒中 51 軒、同じく相模原市の当麻 No.3 遺跡の 86 軒中 34 軒、同田名花ヶ谷戸遺跡の 64 軒中 21 軒、同川尻中村遺跡の 91 軒中 39 軒と相模川流域の諸遺跡からデータがあがっていた。この中から屋内埋甕の性格について考察している当麻 No.3 遺跡の報告書を取り上げてみよう。

86 軒の住居址内から発見された埋甕は 34 基で、全体の 40% が埋甕保有の住居であった。埋甕に付随する施設として敷石住居址に見られる張出部をあげる山本氏は、「埋甕は接続部と張出先端部の 2ヶ所に設置したものに限られ、埋甕と張出部との関係の強さを示している」（山本 1977）とし、加曾利期末に出現した柄鏡形敷石住居は、加曾利 E 式期初期に見られる埋甕を中心とした張出構造から起源したものに他ならず、「そこには、加曾利 E 期後半から末期に至る時期における住居内埋甕の急激な増加と、それに伴う場の拡大が想定される」と述べている。埋納土器の 4 期区分地域別データやグラフからもその傾向は読み取ることができ、山本氏の想定を裏付ける結果となった。

東京都で資料が明確だったのは、石斧埋納土器が 3 基検出された多摩 NT.No9 遺跡と、入子埋設が多かった多摩 NT.No.72・795・796 遺跡の 2 遺跡であった。前者は 50 軒中 18 軒で 36%、後者は 185 軒中 42 軒で 23% となり、神奈川県より低い山梨県より高く、ほぼ長野県と同率といった埋甕保有率であった。

埼玉県で埋甕保有率に触れていたのは、大形の両耳壺が埋設されていた入間市の坂東山 B 遺跡、唯一の屋内石罨埋納土器が出土した深谷市台耕地遺跡などがある。前者は 31 軒中 11 軒が保有しており、この検出状況を「全体の 1/3 に見られ、他の集落より高率の様に思われる」(谷井・宮崎 1973) と記している。後者は 21 軒中 5 軒しか埋甕が検出されていなかった。

千葉県と栃木県からは良い資料が得られず、最後は群馬県の事例を取り上げる。赤城山西麓の三原田遺跡⁶⁵は群馬県を代表する縄文大集落遺跡である。ここでは前期黒浜期～後期堀ノ内期までの竪穴住居址 341 軒が発掘されている。この膨大な量の住居址を整理するため住居形式を定め、土器形式との組み合わせで編年を行っている。同遺跡における中期後葉～後期初頭にかけて見られる住居形式は、柱穴の数、形状、周溝の有無、埋甕の有無、炉形などの組み合わせで B から H に分類されている。埋設土器を持つ概期の住居形式は H 形で、定義は「床面に敷石を持ち、石組炉と埋甕は伴うが、炉甕は稀なことを特徴とする竪穴住居址」であり、これに伴う土器形式は「加曾利 E 式新～称名寺、堀之内 1 式」となっている。

埋甕を持つ H 形と形式不明でも埋甕を持つ住居を、住居址一覧の 243 軒の中から拾うと 61 軒となった。計算すると、三原田集落の住居内埋設土器保有比率は 25%であった。

群馬県域の縄文人は森林をひかえた眺望のきく台地上を好んで居住したという。榛名山東麓に位置する行幸田山遺跡は利根川を挟んで、5 キロ隔たった三原田遺跡と向き合っている。赤城山麓、榛名山麓と立地条件が同じであるうえ、土器形式、住居形式が似ており、台地の狭まっ

た地点に住居が密集することまで共通しているが、規模は三原田遺跡より小さく発掘された住居址は 40 軒である。

同遺跡からは規模 6.0mx5.6m の 7 号円形住居址から幼児の頭大の亜角礫埋納土器を検出しているが、埋設土器は 7 号例も含め 3 例しか報告されていない。したがって、集落での保有率は約 8%であった。

以上、埋設土器の集落内保有率を地域別に見てきた。資料が少ないので正確とは言えないが、それでも地域の傾向は出ていると考える。地域別に平均値をとると、長野県約 30%、山梨県 26%、神奈川県 40%、東京都 26%、埼玉県 30%、群馬県 22%となった。一番比率が高かった神奈川県例でも 5 軒に 2 軒の割合であるから、埋設土器を持たない住居の方が持っている住居より多かったことは疑いがない。集落の長い時間軸で考えれば、比率が高くなる時期もあっただろうが、それでも全戸が付帯設備を完備していたわけではなさそうだ。

もし埋設土器遺構が幼児甕棺や胎盤収納容器とするなら、出生率も幼児死亡率も 30%前後と低かったことになる。これはかなり低い数字と言えるのではないだろうか。

第3章 考察

各地域の報告例から埋納土器の特性を探ってきた結果、次の諸点が明らかになった。まず縄文時代中期後葉から後期にかけて見られる埋納土器の初現地は中部高地であった点、埋める土器の種類、内容物の選択、受容の仕方には地域性だけでなく、集落間でも、同一集落の住居址間でも生じていた点、変遷図や期区分別のデータから、中部高地から関東南部そして北関東への伝播の流れも見て取れた点、住居形式によって内容

品の選択には偏向が認められ、この時期の埋設土器は住居形態と切り離して語ることはできない点等である。

さらに各住居址と埋納品との関連を考えるが、その前に敷石住居址の扱いに触れておこう。すでに各論で述べたように、その多くが柄鏡形に属すると考えられ、検出数も少なく確定要素が少ないことから資料には含めず、分析には円形、隅丸方形、柄鏡形の3住居形態で行うことにした。

円形住居址は長野県域33例を最多とする計48資料、隅丸方形住居址はやはり長野県域の17軒を最多として計30資料、柄鏡形住居址は神奈川県・埼玉県の各14軒を最多として計43資料となった。

住居形式との関係が顕著に表れていた埋納品は、石斧・石鏃そして入子土器であった。石斧埋納は円形で4例、隅丸方形で5例あったが、柄鏡形の住居址からは検出されていない。一方の石鏃は、円形・隅丸方形ともに1例ずつであったが、柄鏡形からは6例の石鏃埋納土器が検出されている。

円形住居址出土の石製品は、石匙、すり石、横刃形石器、磨石、搔器、スクレーパー、石棒状石器、とバラエティに富んでいる。隅丸方形住居址の石製品は、敲石、スクレーパー、横刃形石器、柄鏡形住居址からは、敲石、スクレーパー、磨石、軽石性浮子が検出されている。これを見る限り石製品埋納に住居址間の違いはさほどなく、石斧と石鏃に嗜好の傾向が出ていると言えよう。

石鏃に関しては、遺跡数の多い長野県域で未だ検出されていない。報告例はゼロである。これは住居形式との関連云々より中部高地で埋納品として選択されなかった、という事実の方が意味あることかもしれない。

内蔵品としての土器類であるが、円形住居址では入子より儀器と目されるやや小ぶりの土器を入れ納める例が多く、その比率は28%であった。隅丸方形の12%、柄鏡形の8%と比べるとより一層その傾向がはっきりとする。反対に入子埋設は、円形から隅丸方形そして柄鏡形へと徐々に数を増やしている。小形土器が持っていた祭司的な要素が消え、二重に埋設することへ重きを置く傾向がうかがえる。グラフを並べる（付録グラフ11）とその様子をはっきりとし、まるで住居形式の変化過程を見ているようである。

土器に入れるものに規制か嗜好か風習が作用していたのは間違いないが、地域と住居址とは複雑に絡み合い、地域だけ住居形式だけではと切ることにはできない。言葉を換えれば、長野県域に多い円形住居址と、神奈川県・埼玉県に多い柄鏡形住居址では、石斧埋納、石鏃埋納、入子埋設に偏向が見られ、隅丸方形住居址はその中間で両方の要素を併せ持っている、ということになる。

埋納土器は発生後、住居址と深い関連を持ちながら変化しつつ盛行し、やがて衰退している。埋納品は宝物的なものではなく、日用品と呼べる道具、剥片、壊れた石器、土器片、土器、自然石などが多かった。検出物を見ると、「希少品を交易のために埋設保存」したとは言い難い。環境の不安定な時期に出現した埋納土器のその用途は、家族・集落の安定と平安を祈願したまじないではなかつただろうか。そんな考えが頭をよぎる。

概期の中心加曾利期には土器内に遺体や人骨を入れ埋める風習は一般化してはいなかった⁶⁶。千葉県松戸市殿ガ谷戸遺跡のように、稀に住居址内墓壙が検出される例はあるが、多くの遺跡で墓域は住居址とは離

れて設けられている。加曾利期の埋設土器が持っていた意味が時代の中で変わっていき、縁辺で再登場したのが栃木県や千葉県に見られる埋葬に伴う土器ではないかと考える。

もし埋設土器が埋葬用や胎盤用であるなら、それが生じた時に地面を加工することになるが、建築時に柱穴に並べて埋設土器を設けた例、柄鏡形住居址の様に柄部と接続部、柄部と主体部とセットで埋置するケースなどはこれでは説明できない。保有比率が低すぎることもまた問題であろう。

今後概期の埋設土器内部から人骨が検出される可能性は残されているが、胎盤の遺存検出は困難とされている。証拠が挙げられない状況でありながら推測だけで用途を断定しようとする傾向、後期堀ノ内期の殿平賀遺跡被土器小児骨検出例をもって縄文時代すべての時期に同様の風習があったと拡大解釈する傾向には危惧を覚える。

概期の埋納土器は、住居形式とは切り離して論じることができない要素を数多く持っていた。この中に幼児遺体や胎盤を入れ埋めた例がなかったと言い切ることができないが、住居形式に配慮して取り扱う必要がある遺構であることは間違いない。

埋納土器はその特徴から、検出時期、検出住居址・集落との関連で検討すべき遺構であり、縄文時代に見られる埋設土器すべてを「埋葬用」もしくは「胎盤収納容器」と断定するべきではないと考えるものである。

終わりに

埋納土器に興味を持ってから7年が過ぎた。この間、埋設土器と柄鏡形住居址との関連性の深さを知ったが、先入観念を持つことを恐れた

ため、「敷石住居址の研究」(山本 2002)の一覧を参考にさせてもらった以外、敢えて住居址関連の先行研究には目をつぶった。白紙の状態を対象である埋納土器と向き合いたかったからである。

調査は一覧を元に報告書を調べ、その中に類例と書かれた報告書を読んで事例を調査する、これを繰り返す方法で行った。集めた資料は地域別にまとめ、事例を埋納、入子、両耳壺、注口土器、蓋付き、特殊土器に分類した。個々の土器は、土器形式・内容物・内容物の有無・検出状況・サイズ等を記載し、住居址に関しては形状・規模・炉形等を調べ、遺跡に関しては立地環境も加えてまとめた。

一番頭を痛めたのが、土器形式の統一である。これは「縄文時代中期集落の景観」(安孫子 2011)などを参考に、各遺跡の土器形式を新地平編年と併記することで解決した。資料すべてを新地平編年に置き換えることで4期区分分けができ、分析に必要な基礎データが揃った。

当論考で目指したことの一つは、わかりにくいデータを可視化することだ。基礎データを基に最初に行ったのが分布図作りである。当初は手書きで地図上に遺跡を落としていったのだが、苦勞の割には正確さに欠けるとわかり断念。遺跡の緯度経度を測り、Google Mapを使用することで全期と4期区分の分布図を完成させた。

次に地域別検出数や4期区分別検出数を棒グラフにとり、地域性や事例数増減の様子を提示した。埋納品に関しては種別分類して住居址別にまとめ円グラフにしてみた。この作業を行って初めて、石斧・石鏃に住居址との関連性が見いだせ、手応えを感じた瞬間でもあった。

今回一応の成果は得たが力不足のため、埋納土器と屋内祭祀との関係、逆位の土器の扱い、埋設角度の問題、等に手を付けられなかった。

見落としの事例もまだまだ眠っているであろうとも思う。それらは今後の課題として、当論考によってこの時期の埋設土器により一層の注意が払われ、今後の発掘では詳細な考察がなされるよう、それが又、大きな変革期であった縄文時代中期後葉の研究に貢献することを期待する。

最後に、本論文作成にあたり的確な指摘で完成まで導いて下さった、指導教官の五味文彦教授に感謝の意を表します。

不慣れな調査法を見かねて著書を送って下さった安孫子昭二氏、長時間の利用を快く許可して下さった東京都埋蔵文化財センター資料室の皆様、長野県伊那地方の土器形式分類に力を貸して下さった功刀司氏をはじめとした長野県尖石縄文考古館の皆様、ありがとうございました。また、中越2遺跡のコピーを送って下さった宮田村教育委員会の小池勝典氏、桂野遺跡情報を教えて下さった帝京大学文化財研究所の櫛原功一氏に心から感謝いたします。

1 放送大学卒業論文「埋納土器についての考察」2009年度

2 桐原 健(1967)「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』第18巻3号 財団法人古代学協会

3 渡辺 誠(1970)「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40号

4 木下 忠(1970)「戸口に胎盤を埋める呪術」『月刊考古学ジャーナル』42号
ニュー・サイエンス社

5 木下 忠(1976)『埋甕』雄山閣

6 山本輝久(1976)「敷石住居出現のもつ意味(上)(下)」『古代文化』28号2～3 古代学協会

7 田中英司(1995)「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』第80巻2号 日本考古学会

8 神村 透(1974)「埋甕と伏甕—その違い—」『長野県考古学会誌』19・20合併号 長野県考古学会

- 9 末木 健 (1978) 「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格—予察—」『信濃』第 30 卷 4 号 信濃史学会
- 10 長野県 (1982) 『長野県史』社団法人長野県史刊行会
- 11 縄文時代の国宝第一号となった棚畑遺跡の「縄文のビーナス」に続き、2014 年には中ッ原遺跡の「仮面の女神」国宝に指定された。
- 12 水野正好 (1978) 「埋甕祭式の復元」『信濃』第 30 卷 4 号 信濃史学会
- 13 縄文時代中期初頭から後葉にかけて、中国・四国・近畿地方を中心に展開した土器様式。
- 14 神村 透 (1973) 「南信地方の埋甕について」『長野県考古学会誌』15 号 長野県考古学会
- 15 船元 2 式には貉沢式が併行。小林達雄 (2008) 『総覧 縄文土器』
- 16 武藤雄六 (1970) 「有孔鏝付土器」『信濃』第 22 卷 7 号 信濃史学会
- 17 長沢宏昌 1980 「有孔鏝付土器の研究」『長野県考古学会誌』35 号
- 18 丹野雅人 1985 「注口土器小考—縄文時代中期終末期における様相—」『研究論集 III』東京都埋蔵文化財センター
- 19 細田 勝 (2008) 「加曾利 E 式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 20 榎原功一 (2008) 「曾利式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 21 藤森英二 (2012) 「長野・山梨県の中期土器編年について」『長野県考古学会誌』143・144 合併号 長野県考古学会
- 22 三ツ橋正夫 (1994) 「白色粒子と降灰現象」『上中丸遺跡 (下)』P645-647 上中丸遺跡調査団
- 23 長沢宏昌 (1997) 「山梨県内出土の注口土器について」『山梨県史研究』5 号 山梨県
- 24 篠原 武 2008 『2007 年度下半期遺跡調査発表会要旨』「上中丸遺跡」富士吉田市教育委員会
- 25 小林 茂ほか 1992 『秩父・合角ダム水没地域総合調査報告書』小鹿野町教育委員会
- 26 女夫石遺跡概報 <https://www.city.nirasaki.lg.jp/docs/2013021610743/>
- 27 藤沢宗平 (1976) 「伏甕考—特に、底部穿孔伏甕について—」『長野県考古学会誌』27 号 長野県考古学会
- 28 小林達雄 (2002) 『縄文土器の研究』学生社
- 29 千葉県 (2002) 『千葉県史』財団法人千葉県史料研究財団
- 30 後藤和民 (1976) 「加曾利南貝塚人の埋葬」『加曾利南貝塚』P192-203
- 31 関根孝夫 (1973) 「住居址に見られる特徴」『貝の花貝塚』P184-190
- 32 安孫子昭二 (2011) 『縄文中期集落の景観』アム・プロモーション等参照
- 33 加曾利 E 式土器に他形式土器の変遷を絡め、基本となる加曾利 E1~E4 式期までを 10a から 13b まで 11 段階に区分し編年したもの
- 34 山本暉久 (1976) 「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について (1) (2)」『信濃』第 29 卷 11 号 信濃史学会
- 35 宮坂光昭 (1971) 「茅野和田における縄文中期集落址の分析」『長野県考古学会誌』11
- 36 戸田哲也 (2006) 「曾利 III 敷土器の伝播と変容」『ムラと地域の考古学』同成社
- 37 長崎元廣 (1978) 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義 (上) (下)」『信濃』第 25 卷 4 号 信濃史学会
- 38 功刀 司 (2008) 「住居跡出土の軽石製・土製儀器」『考古学ジャーナル』578 号

- 39 小野正文ほか（1987）「釈迦堂 II」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』21集
- 40 櫛原功一ほか（2004）『桂野遺跡』御坂町教育委員会
- 41 小林勝典・渡辺 誠（2014）「人面付小型壺を内蔵する埋甕」古代学協会
- 42 渡辺 誠（1980）「埋甕研究の背景」『長野県考古学会誌』35号 長野県考古学会
- 43 佐藤甦信（1972）「瑠璃寺前遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-下伊那郡高森町地内その 1-』日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会
- 44 山本暉久（2002）『敷石住居址の研究』六一書房
- 45 宮沢恒之ほか（1973）「城平」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-伊那市西春近-』日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会
- 46 笹津備洋（1956）「小型石斧を収蔵せる注口土器の一例」『石器時代』3号、P62 石器時代文化研究所
- 47 大塚広住・須賀弘子（2000）『陣が前遺跡』松戸市遺跡調査会
- 48 堀越正行（1997）『曾利貝塚D地点発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 49 花輪 宏ほか（1987）『堀之内一市川市堀之内土地地区画整理発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 50 村田文夫（1975）「柄鏡形住居址考」『古代文化』11号 古代学協会
- 51 本橋恵美子（2006）「縄文時代中期後葉の柄鏡形住居出現期の様相」『埼玉の考古学 II』埼玉考古学会
- 52 山本暉久（1980）「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』9号 神奈川考古同人会
- 53 小松虔（1966）「波田村葦原遺跡第一・第二次調査概報」『信濃』第18巻4号
- 54 長沢宏昌（1966）「中谷遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』116 山梨県教育委員会
- 55 佐原 眞（1985）「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立民族博物館研究報告』第7集、P523-573
- 56 田中英司（1995）注7に同じ
- 57 田中英司（2007）「デポと交易」『縄文時代の考古学』6号、P287-296
- 58 寺村光晴（1965）「御殿山遺跡調査報告」『武蔵野市史』武蔵野市役所
- 59 浦和市（1996）「会ノ谷遺跡（第7次）」『浦和市遺跡調査会』第203集
- 60 納入法が記載された石斧は7点しかなく数が合わないが、残り1点は重機掘削時の廃土に混じり注口土器の破片と共に検出されている。
- 61 小林茂ほか（1992）『秩父・合角ダ水没地域総合調査報告書』小鹿野町教育委員会
- 62 注2に同じ。
- 63 山本暉久（1995）「柄鏡形(敷石)住居成立の再検討」『古代探叢 IV』早稲田大学出版部

- 64 丹羽祐一（1980）「埋甕集団の構成と婚姻システム」考古学研究室
- 65 赤山容造（1980）『三原田遺跡』群馬県企画局
- 66 猪越公子（1973）「縄文時代の住居址内埋甕について」『下総考古学』下総考古学研究会